第6節 竪穴住居床面にみられる斜坑状のピットについて

1. はじめに

古御堂笹尾山遺跡と茶畑第1遺跡では古墳時代中期後葉から後期にかけての竪穴住居・竪穴27棟が 検出された。このうち、竪穴住居9棟、竪穴1棟の南東側側壁直下の床面に、遺構外方に向かい斜坑 状に掘削されたピットを検出した。

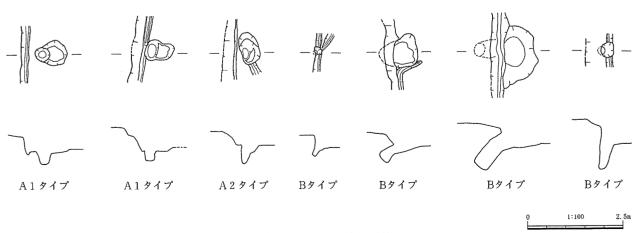
従来より、鳥取県の古墳時代の竪穴住居には壁際の床面中央に掘削されたピット(いわゆる特殊ピット)の存在が知られている。これまで古墳時代前期から中期の遺構については論じられてきたが、調査例の少なさもあって後期の遺構については多くを語られていない(駐1)。ここでは、古御堂笹尾山遺跡と茶畑第1遺跡で検出した斜坑状ピットの特徴について述べ、鳥取県西部の遺跡を中心に若干の検討を行いたい。

2. 特徴

まず、古御堂笹尾山遺跡、茶畑第1遺跡で検出した斜坑状ピットの特徴をまとめておく。

- ①すべて南東側の側壁直下ほぼ中央に検出し、遺構の外に向かい斜め下方に掘削される。
- ②断割トレンチの土層断面を観察した結果、地上には貫通しない。
- ③ピット底面は床面から約40cm~70cm低い位置になるものが大半である。
- ④ピット壁面には被熱した痕跡は認められず、埋土中にも顕著な炭化物は混入しない。
- ⑤古御堂笹尾山遺跡竪穴住居23は焼失住居であり、P1内から多量の炭化物・焼土が検出された。 したがって住居機能時には、P1はオープン状態であったと考えられる。
- ⑥ピット周辺の床面はテラス状に浅く窪むものが多く、ピットに向かいスロープ状をなすものもある。
- ⑦遺物はテラス状の窪み部分もしくはその周辺で出土するものが多く、窪み部分からピット内に流 れ込んだ状態で出土するものもある。

こうした特徴から、柱穴とは考えがたい。東海から関東地方の古墳時代中期~後期の住居跡には、 方形の住居一辺の中央付近に竈をもつものが多い。しかし、斜坑状ピットに被熱した痕跡は認められ ず、地上に貫通しないことから、炉跡・煙道も想定できない。



壁際のピットの断面形態

3. ピットの分類

古墳時代前期以降、竪穴住居の壁際床面中央には柱穴以外に使用されたと思われるピットが掘削される。斜坑状ピットとは位置的な類似性が認められ、柱穴以外の機能が想定されることでも共通し、関連が想定される。そこで、側壁直下に掘削されるピットを、タイプ別に分類することを試みたい。ピットの断面形態をもとにA、Bに大別し、AタイプはさらにA1とA2に細分を行った。

Aタイプは住居側壁際の床面中央に位置し、床面に対してほぼ垂直に掘削されるものである。平面 形は方形または円形のものがある。この内、垂直に掘削されるものをA1、ピット壁面が住居内側に やや傾くものをA2とする。

Bタイプは住居側壁中央部に位置し、住居の外側に向かい斜め下方に掘削されるもの(斜坑状ピット)である。底面まで直線的に掘削されるもの、底面に向かいやや先細りするものなどがある。

4. 斜坑状ピットの盛行期

A 2 タイプには、 2 期に比定される古御堂笹尾山遺跡竪穴住居32がある。百塚第 7 遺跡19号住居跡 P 6 (2 期から 4 期)・34号住居跡 P 4 (2 期もしくは 3 期)もこのタイプと思われる。床面に対してほぼ垂直に掘削されていたピットが、斜坑状になる過渡期の形態と推察される。

Bタイプ(斜坑状ピット)は、古御堂笹尾山遺跡、茶畑第1遺跡、百塚遺跡群 (ﷺ) に検出されている。3期から5期にかけて継続して掘削され、4期に盛行する。古御堂笹尾山遺跡と茶畑第1遺跡に検出した3期から5期に比定される竪穴住居と竪穴19棟のうち、Bタイプが掘削されるのは10棟である。

仁王堂遺跡 S I 10 P 9 は B タイプの盛行期にあたる 4 期に比定されるが、A 1 タイプの形態をとる。 3 期から 5 期にかけての竪穴住居が検出される仁王堂遺跡、上種第 6 遺跡では B タイプは掘削されず、 古御堂笹尾山遺跡の様相とは大きく異なる。 B タイプの有無が地域色、または集団間の違いによるものなのかは、調査例が少ないこともあり不明である。

5期に比定される古御堂笹尾山遺跡竪穴住居15は、側壁直下の床面中央にピットは掘削されないことから、5期には壁際のピットが消滅する可能性がある。7世紀後半に比定される東高田遺跡 S I 05、 妻木晩田遺跡や青木遺跡で検出された8世紀代の竪穴住居には、壁際床面中央のピットは確認できない。A・B両タイプ共に、5期以降8世紀にかけて消滅していくものと思われる。

斜坑状ピットの変遷

	前期	中期前葉	中期中葉	中期 後葉 (1期)	中期 末 (2期)	後期 前葉 (3期)	後期 中葉 (4期)	後期 後葉 (5期)	終末期	7 с	8 c 前葉
A1タイプ											
A 2タイプ											
Bタイプ											

第6章 特論

5. まとめ

今回、古御堂笹尾山遺跡と茶畑第1遺跡の調査により確認したBタイプは、位置的な類似性と断面 形態の各時期ごとの変遷から、古墳時代前期以降、竪穴住居の側壁直下の床面中央部に掘削されるピ ットとの関連が推察される。床面に対してほぼ垂直に掘削されていたピット(A1タイプ)が、2期 に断面形態が斜坑状へと変化し(A2タイプ)、Bタイプへと変遷するものと考える。Bタイプは3 期から5期にかけて西伯耆の一部の集落で採用され、形態的にバラエティーに富む。その特徴から柱 穴や炉跡、煙道とは考えにくい。今後、当該期の集落調査の際にはこれらの特徴を認識し調査する必 要がある。これが西伯耆の一部に特徴的なピットなのかは検出例の少なさもあり具体的な言及までは (森本) 及ばなかった。今後の課題としたい。

床面から ピット 断面形の 遺跡名 遺構名 の深さ 時期 位置 備老 タイプ No. (cm)南東側壁面 テラス P 1 古御堂笹尾山遺跡 竪穴住居26 76 1期 A 1 2期 南東側壁面 押平尾無遺跡 竪穴住居22 P 3 28 A 1 古御堂笹尾山遺跡 竪穴住居13 P 6 56 2期 A 1 南東側壁面 南東側壁面 テラス 古御堂笹尾山遺跡 竪穴住居22 P 1 42 2期 A 1 古御堂笹尾山遺跡 竪穴住居27 P 1 70 2期 北東側壁面 テラス、 溝 A 1 P 3 2期 南東側壁面 古御堂笹尾山遺跡 竪穴住居32 46 A 2 古御堂笹尾山遺跡 竪穴住居14 P 5 70 3期 В 南東側壁面 テラス 古御堂笹尾山遺跡 竪穴住居18 3期 A 1 南東側壁面 P 5 50 古御堂笹尾山遺跡 竪穴住居21 P 6 3期 В 南東側壁面 テラス 64 古御堂笹尾山遺跡 竪穴住居23 P 1 24 3期 В 南東側壁面 古御堂笹尾山遺跡 竪穴住居29 P 6 3期 北東側壁面 テラス 35 A 1 南東側壁面 テラス 古御堂笹尾山遺跡 竪穴住居16 P 5 60 4期 B 南東側壁面 スローブ 古御堂笹尾山遺跡 竪穴住居24 P 6 4期 В 74 古御堂笹尾山遺跡 竪穴住居25 P 1 南東側壁面 48 4期 В P 1 古御堂笹尾山遺跡 竪穴 5 66 4期 В 南東側壁面 P 7 4期 南東側壁面 茶畑第1遺跡 竪穴住居18 В 50 南東側壁面 スロープ 古御堂笹尾山遺跡 竪穴住居19 a P 24 4期 В 南東側壁面 テラス 古御堂笹尾山遺跡 竪穴住居19 b P 5 60 4期 В <類例> 38号B住居跡 p q 118 3 期 В 南東側壁面 百塚第7遺跡 テラス 50号住居跡 P 6 3期 В 東側壁面 百塚第7遺跡 118 百塚第7遺跡 22号住居跡 P 4 24 3期もしくは4期 В 東側壁面 49号住居跡 百塚第7遺跡 P 7 48 3期もしくは4期 R 南東側壁面 南西側壁面 註3 12' 号住居跡 В? 百塚第1遺跡 12号住居跡 4期 B ? 南西側壁面 註3 百塚第1遺跡 南東側壁面 テラス 南西側壁面 テラス 百塚第5遺跡 S I 45 P 5 30 4期 В В? 4期もしくは5期? 百塚第8遺跡 5 号住居跡 南西側壁面 東側壁面 テラス P 3 В 百塚第5遺跡 S I 04 41 P 1 南東側壁面 百塚第5遺跡 S I 53 30

鳥取県の斜坑状ピット

凡例 テラス:テラス状の窪み スロープ:スロープ状の窪み 溝:ピットに伴う溝

(註1) 岩崎康子編 1998 「古墳時代集落の様相」『石脇第3遺跡-森末地区・操り地区-、石脇8・9号墳、 寺戸第1遺跡、寺戸第2遺跡、石脇第1遺跡』 鳥取県教育文化財団発掘調査報告書54 鳥取県教育文化財団

(註2)編年観は、本報告書(第6章第8節)による。

(註3)中山和之編 1989·11 『百塚第1遺跡』 淀江町埋蔵文化財調査報告書第16集 淀江町教育委員会

(註4) 百塚遺跡群の斜坑状ピットは、筆者が各報告書をもとに斜坑状ピットの可能性があると判断したものである。

図版出典

A 1 タイプ: 夏谷遺跡44号住居、古御堂笹尾山遺跡竪穴住居26

A 2 タイプ: 古御堂笹尾山遺跡竪穴住居32

Bタイプ: 古御堂笹尾山遺跡竪穴住居14・23・25、竪穴 5

※参考文献は省略させて頂いた。

第7節 弥生時代遺構出土桃核についての一考察

1. はじめに

桃はウメ・スモモと並んで非常に硬い核を持つために残りやすく、遺構から出土することも少なくない。また、桃核の出土例は弥生時代中期以降全国的に広がり、時代と共に出土数は増加しているい。桃の呪術的性格については民俗学からの検証が多くなされているものの、発掘調査報告では自然遺物として理解され、種実同定にとどまるものが多い。しかし、桃核は他の植物遺体とは異なり人の生活に密着した遺構から出土する例が多く、単に古環境の復元手段としてのみならず、社会活動の中での役割を持った遺物としての理解が可能と思われる。古御堂笹尾山遺跡・押平尾無遺跡の弥生時代後期の遺構からも桃核が出土しており、この地域でも弥生時代の人々の生活の中に桃が存在していたことが窺われる。ここでは桃核の出土状況を検証することにより、桃の使われ方を考える。

2. 出土状況の分類

桃核出土遺跡は鳥取・島根両県で33遺跡61例である。時代は縄文時代が2遺跡2例、弥生時代が19遺跡37例、古墳時代が4遺跡10例、近世が1遺跡3例、時期不明のものは10遺跡10例である。このうち遺構内から出土したものは、弥生時代18遺跡35例、古墳時代4遺跡9例、近世1遺跡3例、時期不明1遺跡1例である。そのうち弥生時代の出土状況を分類すると以下のようになる。

①居住域周辺出土 貝塚・環濠から出土している。

姫原西遺跡では、掘立柱建物を中心とする集落の南側の旧河道壁面に形成された貝塚から1500点以上が出土した。妻木晩田遺跡では埋没しつつある環濠内に投棄したと見られる土器と共に26点が出土した。これは幅約10.5mのトレンチで調査したものである。

②居住域内出土 竪穴住居、掘立柱建物、テラスから出土している。

竪穴住居 床面直上から出土したのは4遺跡4例である。このうち、古市宮ノ谷山遺跡竪穴住居7は焼失住居で、炭化材と共に多数の土器が床面から出土し、廃絶時の様相をとどめているものと考えられる。床面直上から横転した状態で出土した甕と壺の破片に重なるように桃核が40点あまり出土し、そのうちの4点は果肉が残存していた。

住居のピットから出土した例は3遺跡5例である。このうち、押平尾無遺跡竪穴住居8は、主柱穴と考えられるP4から1点出土した。その他は中央ピットからの出土例だが、すべて埋土中から出土しており、埋没過程での混入の可能性も考えられる。

住居覆土中から出土したのは6遺跡10例である。このうち押平尾無遺跡の竪穴住居8は焼失住居である。住居の屋根土が崩落したと考えられる層から2点、最下層から1点出土している。井図地中ソネ遺跡SI6は床面直上からの出土遺物はなく、覆土中から多量の遺物が出土している。桃核はそれらの遺物と共に覆土中から6点出土しており、土器と共に人為的に投げ込まれたと考えられる。その他の出土状況からは住居と直接関連するものであるかは判断できない。

掘立柱建物 古御堂笹尾山遺跡掘立柱建物3のP2・3から土器片と共に各1点ずつ出土した。

テラス 2遺跡 2 例である。南谷大山遺跡 B S S 01のピットから1点出土した。どのピットから出土したかは不明である。

このほか居住域かは明らかではないが青谷上寺地遺跡SK201の底面直上から23点出土した。土坑からは穿孔のあるイノシシを含む獣骨約90点が出土しており、祭祀に使用されたと考えられる。

第6章 特論

以上、桃核の出土状況を大別した。このうち①では集落からの生活残滓と共に出土しており、投棄 したものと考えられる。また、姫原西遺跡では貝塚のほとんどの層から出土していることから、桃の 恒常的な使用が想定される。

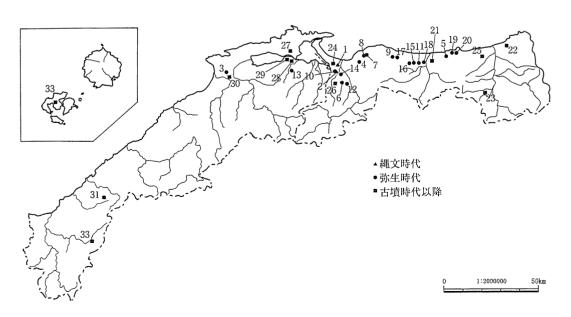
②では竪穴住居の床面のほか、ピットから出土するものが3例あることは注目される。古御堂笹尾山遺跡掘立柱建物3では、2つのピットから各1点出土したほか、押平尾無遺跡や南谷大山遺跡でも住居やテラスのピットから出土している。いずれも弥生時代後期から古墳時代初頭の遺構であり、偶発的に混入したものとは考えがたい。建物を建てる際に意図的に桃あるいは桃核を投入したと考えられる。青谷上寺地遺跡SK201では祭祀に使用された具体像が窺われる。

3. まとめ

以上、鳥取・島根両県の遺構から出土する桃核の出土状況を検証したが、居住域では柱穴の中から桃核が出土した例が3遺跡にみられ、桃を使用したまじない的な行為が行われたことが考えられる。すなわち、弥生時代後期の山陰地方に桃に対する特別な意識があったと思われ、このことからは、『古事記』・『日本書紀』の黄泉国説話や法隆寺の柱に埋め込まれた桃核にみられる桃呪術の源流ともいえる意識が弥生時代後期に遡ることが考えられる。今後、資料の蓄積とともに他地方の出土状況の検証や、出土した桃核の自然科学分析によって、どのように桃を用いた祭祀が広がったのかを明らかにすることを課題と考える。 (小林)

註(1) 寺沢薫・寺沢知子 1981 「弥生時代植物質食料の基礎的研究 - 初期農耕社会研究の前提として - 」

『考古学論攷』 第5冊 橿原考古学研究所



桃核出土遺跡 位置図

表1 桃核出土遗跡一覧

						衣	1 桃核出土遺跡一	筧						
		No.	遺跡名		所在地		出土遺構	出土点数(点) 時代	参考文獻				
縄		1	目久美遺跡	鳥耶	2 米子市目久美	包含層	包含層	11	中期~後期	米子市教育委員会鳥取県河川線 1986『目久美遺跡』				
文		2	古市河原田遺跡	鳥耶	米子市古市	包含層	包含層	1	晩期	(財)鳥取県教育文化財団 1999 『古市遺跡群 1 古市カハラケ田遺跡 古市河原田遺跡』				
	居住	3	姫原西遺跡	島根	出雲市姫原町	貝塚	貝塚	多量 (1500以上)	終末期	建設省松江国道工事事務所 島根県教育委員会 1999 『姫原西遺跡』				
	城					竪穴住居	住居2 排水溝	14		pt Write Market M. A. A. A. A.				
	周辺	4	妻木晚田遺跡	鳥取	西伯郡淀江町	竪穴住居	住居2 床直	17☆	後期	鳥取県教育委員会 2003 『史跡妻木晩田遺跡第4次発掘調査報告書				
	122					環濠	環濠T3 (S・J・T層・スモモ)	26☆ (18·6·2)個		一洞ノ原地区西側丘陵の発掘調査ー』				
						竪穴住居	B-SI21 中央ピット埋土下層	1?	終末期	(財)鳥取県教育文化財団 1993				
		5	南谷大山遺跡	鳥取	東伯郡羽合町	テラス	B-SS1 ピット内	1?	後期後半	『南谷大山遺跡 南谷ヒジリ遺跡 南谷22・24~28号墳』				
		-	田住松尾平遺跡	to IEs	35 M 38 A D Berry A.	-				会見町教育委員会 1995				
		6	田王松起平題跡	鳥取	西伯郡会見町田住	テラス	SS-2 埋土下層	1	後期	『田住松尾平遺跡』				
		7	古御堂笹尾山遺跡	鳥取	西伯郡名和町		掘立柱建物3 P2 掘立柱建物3 P3	1	後期~ 古墳前期	第3分冊				
				1		竪穴住居	竪穴住居8(下層)	3☆	11 3411791					
			but the first territory.	1			竪穴住居8(P4埋土中)	l☆	後期~					
		8	押平尾無遺跡	鳥取	西伯郡名和町	竪穴住居	竪穴住居9 埋土中層	1☆	古墳初頭	第2分冊 p2-131				
						竪穴住居 竪穴住居	竪穴住居10 埋土中(①層) 竪穴住居12 床直	1☆ 2☆						
				1		竪穴住居	SI91 中央ピット埋土下層	1☆	後期中葉					
		9	笠見第3遺跡	鳥取	東伯郡東伯町笠見	竪穴住居	SI149 P6枚土中	1☆	後期後葉	(財)鳥取県教育文化財団 2004				
弥						竪穴住居	SI152 P5埋土上層	1☆	終末	『笠見第3遺跡』				
生時	居	10	0 古市宮ノ山谷遺跡 鳥取 米子市古市		竪穴住居	竪穴住居7 床直	41☆	後期後葉	(財)鳥草県教育文化財団 2002 『古市遺跡群3 古市宮ノ谷山遺跡 古市古墳群』					
代	住域	11	中尾遺跡	97		S13 床直(貼り床のない部分 で、他の床面より10cm下。)	3☆	後期前築	倉吉市教育委員会 1991 『中尾遺跡発掘調査報告書』					
		12	获名第5遺跡	鳥取	西伯郡会見町获名	竪穴住居竪穴住居	SI3 床直 SI5?	?	青木Ⅲ古期~新	会見町教育委員会 1999 『获名第5遺跡』				
	Ì	13	折原上提東遺跡	島根	八束郡八雲村	竪穴住居	SI8周壁溝内		後期末~	八雲村教育委員会 1994				
	-			+		並八任店	210/日至体力	2☆	古墳前期初頭 後期~	『折原上堤東遺東遺跡発掘調査報告書』				
		14	青木遺跡	鳥取			数個体	古墳時代前期	青き遺跡発掘調査団 1978 『青木遺跡発掘調査報告書田』					
		15	両長谷遺跡	鳥取	倉吉市国府	竪穴住居	3号住居	1?	後期後半	倉吉市教育委員会 1996 『両長谷遺跡発掘調査報告書』				
		16	遠藤谷峯遺跡	鳥取	倉吉市国富	竪穴住居	4号住居址 出土層位不明	1	後期後葉	倉吉市教育委員会 1971 『倉吉市大谷字遠藤谷峰遺跡』				
		17	井図地中ソネ遺跡	鳥取	東伯郡東伯町	竪穴住居	SI6 埋土中(上層·下層)	5(2・3)☆	後期後葉	(財)鳥取県教育文化財団 2003 『井図地頭遺跡 井図地中ソネ遺跡』				
	- 1	10	夏谷遺跡	o m	A-t-d-Tarm	竪穴住居	B地区1号住居下層	1?	後期~	倉吉市教育委員会 1992				
ı	İ	18		鳥取	倉吉市和田	竪穴住居 竪穴住居	B地区38号住居中層	1?	古墳初頭	超古印数有安良宏 1992 『夏谷遺跡発掘調査報告書』				
	ı			-		竪穴住居	C地区49号住居下層? SI04·05 出土地点不明	1? 1?☆						
		19		鳥取	泊村大字宇谷	竪穴住居	S109 埋土中		後期後半	(財)鳥取県教育文化財団 建設省倉吉工事事務所 1992				
-	-			ļ		土坑	SK03 出土地点不明	1?		『宇谷第1遺跡 宇谷大ナル遺跡』				
1	他	20	青谷上寺地遺跡			土坑	SK201 底面上	20	中期~後期	(財)鳥取県教育文化財団 2001 『青谷上寺地遺跡Ⅲ』				
	_	1	目久美遺跡	鳥取	米子市目久美	包含層	包含層		前期~中期	米子市教育委員会鳥取県河川課 1986『日久美遺跡』				
		9	笠見第3遺跡	鳥取	東伯郡東伯町笠見	竪穴住居 土坑	SI122 P7埋土中 SK124 埋土中		古墳前期	(財)鳥取県教育文化財団 2004 『笠見第3遺跡』				
	r					竪穴住居	Si198		古墳前期 長瀬高浜Ⅲ期	: II/ONIO-SEATES				
	-		同じに守いた。本中			竪穴住居	SI192		長瀬高浜Ⅲ期					
古		2,		da Tris	ale (4 aut an America de	井戸	SE11	13	長瀬高浜Ⅱ~Ⅲ	(財)島取果教育文化財団				
墳		21	長額高浜遺跡	鳥取	東伯郡羽合町長瀬	竪穴住居	SI241a 北東部 庄岡が押上下屋の	1	長瀬高浜Ⅱ期	建設省倉吉工事事務所 1997 『長瀬高浜遺跡VII』				
時代							床面か埋土下層? SI243a 北東部 埋土中?		長瀬高浜田期					
	L					包含層	包含層(A区)		古墳時代					
		22	栗谷遺跡	鳥取	岩美郡福部村大字栗谷		SX1			福部村教育委員会 1989 『栗谷遺跡発掘調査報告書Ⅱ』				
		23	大井3号古墳	鳥取	八頭郡佐治村大井	古墳		1☆	6世紀末~7世紀	島取県八頭郡佐治村教育委員会 1982 『大井3号古墳発掘閥査報告書』				
近	T		Ne or I horizonal	J			木器溜I	3	江戸時代後期					
世		24	米子城跡21遺跡	鳥取	米子市加茂町		SD02		ST IN	(財)鳥取県教育文化財団 1998 『米子城跡21遺跡』				
+	+	6	押平尾無遺跡	鳥取	西伯郡名和町	土坑 包含層	SK16 包含層	5 ;	江戸時代前期	第2分冊 p2-131				
			桂見遺跡		鳥取市桂見	不明		1	Į,	島取市教育委員会 1978				
	-		世元之号 枇杷谷遺跡	l			A DECT. D. C. D. C.		Į.	"柱実遺跡発掘調査報告書。 鳥取県西伯郡会見町教育委員会 1987				
	F	26	74.10年2月時	鳥取	西伯郡会見町大字寺内	包含層	A地区 包含層?	1		時以外四日都会見可数有委員会 1987 				
		27	タテチョウ遺跡	- 造跡 - 島根 - 島根県松江市西川津町		包含層	包含層	多量	Į	島県県教育委員会 1979 タテチョウ連等李振嗣宣報告書 I 』 高根県土木部庁川線-島県県教育委員会 1990 タテチョウ通路発禮調査報告書Ⅲ』				
不 明		28	布田遺跡	市田遺跡 島根		不明		?	11.991	建設省松江国道工事事務所 当根県教育委員会 1990				
		29	石台遺跡 島根 松		松江市東津田町	包含層	包含層出土	51	-	埋藏文化財発掘調查報告書項(布田遺跡)。 為根県教育委員会 1986 『石台遺跡』				
	Γ	30	E田谷 I 遺跡 島村		出雲市上塩冶町半分		SE07	5	1	商稅黨數有委員会 1956 [右台選時] 建設省中国地方建設局・島根県教育委員会 1990 『三田谷 [遺跡 vol.3』				
		31 :	安本鄉神代屋遺跡 島根 那珂郡弥栄村		不明	出土地不明	?	I.	品供界外架村教育委員会 2002 長安本郷神代隆遺跡』					
		32 j	前田遺跡	島根	美濃郡匹見町	包含層	包含層出土 B区4·5層	4	E	B根果匹見町教育委員会 1989 『匹見地区県営園場整備				
\perp	上	33	美田遺跡	島根	隠岐郡西ノ島町別府		包含層出土	35	}	F業に伴う遺跡発掘調査報告書Ⅱ』 品根県・西ノ島町教育委員会 2003 『美田遺跡』				
各土物。			/											

遺構名:焼失住居 出土点数☆:炭化して出土したもの 桃核出土遺跡は報告書に掲載されているもののみで、このほかにも多数の遺跡から未報告ながらも出土例があることが考えられる。 また、遺構名や時代等は報告書に掲載されているものを尊重した。

第8節 古墳時代中期から後期の土器について

1. はじめに

茶畑遺跡群のうち、古御堂笹尾山遺跡、押平尾無遺跡、茶畑第1遺跡からは古墳時代中期から後期の集落跡が検出され、当該期の土器様相を窺える比較的良好な土器群が出土した。西伯耆では古墳時代後半期の集落の調査例が少なく、土師器の型式変化の具体相を検討することは困難な状況であった。米子市青木遺跡(1)(2)、大山町仁王堂遺跡(3)、淀江町百塚遺跡群(4)では編年案が提示されており型式変化において一定の方向性はうかがえるものの、いずれも一括資料の数的な限界から須恵器の編年観をベースに配列を行ったとみられ、結果的に土師器の型式変化に混乱が生じている。確かに須恵器の型式変化は全国的にほぼ確立されておりその判断しやすい形態変化から編年の重要な鍵であることは間違いない。しかしながら、実際の一括資料には当然として前後の型式が混在しており、その一部で時期を判断し共伴する土師器の型式組列に反映させることは方法論的に妥当ではない。

本稿では先学の成果を踏まえつつも新たな資料を加味し主要な器種構成をなす土師器の型式変化に注目しその変化の方向性を探る。資料は一括資料と判断されるもののみを使用する。具体的には竪穴住居床面出土遺物を中心に、純粋な一括資料ではないが住居覆土の単一層から出土し短期間に投棄されたと判断される遺物も対象とする。検討する器種は当該期の主要器種をなし、かつ比較的型式変化に富むとみられる甕と高坏である。

検討に際しては、まず口縁部および杯部の型式分類と組列の検討を行い、次に実際の一括資料の中でこれらがどのような出現頻度を示すのかを検討する。須恵器との併行関係は最後に触れる。

2. 分類

現状で確認できる個体が2個体以下でイレギュラーと判断されるものは分類対象から除外した。

甕 複合口縁系甕をA類、単純口縁系甕をB類とする。

複合口縁系甕

- A 1 類 口縁部が直立し2.5cm前後立ち上がるもの。口縁端部は面をなすものが多いが、丸くおさめるものもある。口縁下端は僅かに突出もしくは受け口状をなす。
- A 2 類 口縁部は直立し1.5cm~2 cm程度短く立ち上がるもの。端部は面をなすものと丸くおさめるものがある。口縁下端は受け口状もしくは屈曲するだけであり、突出するものはない。
- A 3 類 口縁部が外傾し1.5cm~2 cm程度短く立ち上がるもの。口縁部下端は屈曲するのみであり 受け口状をなすものはわずかである。端部は面取りもしくは丸く収める。
- A 4 類 口縁部は外傾し僅かに内方に屈曲することで複合口縁を表現するもの。また、口縁外面 下端に沈線を入れる、もしくは外面を肉厚にすることで複合口縁状に表現するものもある。

単純口縁系甕

- B 1 類 頸部で屈曲し口縁部がややカーブしながらのびやかに立ち上がるもの。
- B 2 類 胴部と口縁部が100°前後の角度で「く」の字状に屈曲し、直線的に立ち上がるもの。 口縁部先端は丸く収めるものと、面をなすものがある。
- B 4 類 胴部と口縁部が90°前後の角度で「く」の字状に屈曲し、口縁部が緩いカーブを描

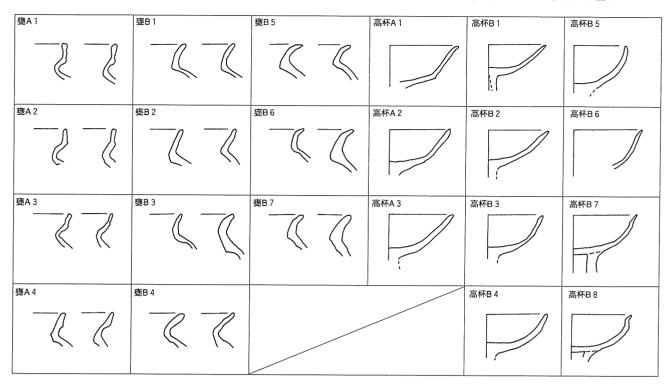


図1 甕・高杯の分類

きつつ立ち上がるもの。

- B 5 類 胴部と口縁部が 80° 前後の角度で屈曲し、口縁部がカーブを描きつつ外反するもの。 端部はさらに外反し細くのびるものが多い。内面ではケズリ調整の上端で鋭く屈曲する。 胴部上端付近の器壁が厚い。
- B 6 類 胴部上端から緩く屈曲しさらに口縁端部付近で外方に屈曲するもの。内面ではケズリ調整の上端で鋭く屈曲する。
- B7類 胴部から口縁部が緩く短く外反するもの。胴部上端付近から口縁部は肉厚で端部は丸く 収める。内面はケズリ調整の上端で鋭く屈曲するものが多い。
- 高坏 杯部外面の下方で段をなすもしくは屈曲するものをA類、屈曲しないものをB類とする。
 - A 1 類 直線的な器形をなし、杯部下半で緩い段をもち屈曲、端部は外反するもの。A 1 ~ A 3 類の脚部の高さは 6 cm前後と想定される
 - A2類 やや丸みを帯びた器形で、杯部下半で僅かな段をもつもの。端部は外反せず細く終わる。
 - A 3 類 杯部外面が僅かに丸く屈曲するもの。端部は細く終わる。B 1 類との区別が微妙ではあるが、外面の屈曲、杯部の高さから判断して A 類に位置付けた。
 - B 1 類 杯部が比較的浅く皿状をなし内面が緩く屈曲するもの。脚部は細く、高さは 6 cm程度である。
 - B 2 類 杯部が浅く皿状をなすもの。端部は細く終わる。
 - B3類 杯部が比較的丸みを帯びて立ち上がるもの。端部は丸くおさめる。
 - B 4 類 杯部が丸く立ち上がるもの。器壁は厚く、端部は丸くおさめる。
 - B 5 類 杯部が椀状をなすもの。端部は僅かに内湾し丸くおわる。器壁はやや厚い。脚部は 5 cm 前後とやや低く、基部における直径は 5 ~ 6 cmと太い。
 - B6類 杯部下半から緩く屈曲し、口縁端部でわずかに外反するもの。端部は細く終わる。器壁

は比較的薄い。

- B7類 杯部は丸く立ち上がり端部で屈曲し外反するもの。脚部は基部の直径が7cm前後、高さが5cm前後である。
- B8類 杯部は椀状を呈し、端部でS字状に屈曲し外反するもの。脚部は基部の直径が7cm前後、 高さは5cm前後が想定される。

3. 型式組列の検討

各タイプのうち、複合口縁系甕は古墳時代前期以来の複合口縁の退化のプロセスで理解され、A1からA4はほぼ組列として認められる。A1が古墳時代中期の口縁形態に最も類似しており、A3は複合口縁としては最終段階、A4は複合口縁の痕跡のみを残す段階と考えられる。したがって変化の方向性としては $A1 \rightarrow A2 \rightarrow A3 \rightarrow A4$ と仮定した。

単純口縁甕は中期末から後期に主体となる形式であるが、比較的バラエティに富み形態的に単純でもあることから変化の方向性がみえにくい。ただ、B6、B7類は次の古墳時代終末期にも見られるタイプであることから後出的と想定される。

高杯のうち、A類は前期以来みられるが、杯部の段の退化現象に注目して $A1 \rightarrow A2 \rightarrow A3$ と仮定した。B類のうち、中期的な高杯であるB1類は他のタイプに先行するものと思われる。また、前期から中期に至る高杯に椀形を呈する杯部や、脚部基部の直径が太い脚部がみられないことから、B5類~B8類は全体として後出的要素と仮定できる。

4. 一括資料における各タイプの出現頻度

こうした型式組列での検討をもとに、各タイプが遺構内出土の一括資料のなかでどのような出現頻度を示すか検討した結果、おおむね以下の5群にわかれるものと判断した。

- 1群 甕は、多数の複合口縁系甕A1類に少数の単純口縁甕が伴う。高杯は中期的なA1類のほかB2·B3類が伴う。
- 2群 甕は、単純口縁甕と単純口縁系甕の割合がほぼ均衡する。複合口縁系甕はA3·A4類の 割合が増加し単純口縁系甕は多数のB2類にB1·B3·B4類が伴う。高杯は、A2·A 3類が出現し、B1~B4類がみられる。
- 3群 甕はA1・A3類はなくA4類が比較的多い。資料が豊富でないがB2類が支配的と想定される。2群とは甕A1類、高杯A類がともに見られないことで区別される。
- 4群 複合口縁系甕と伴う良好な例はないが、少量は伴うものと思われる。 3 群とは甕 B 4 · B 5 · B 7 類が多いことで区別される。高杯には新たに B 7 類がみられる。
- 5群 甕はほとんどが単純口縁系甕B6·B7類である。高杯はB8類の1例のみである。

この5つの群は、既述した型式組列の検討結果から1群から5群への変化の方向性が想定される。 ただし、これは例えば1群より2群が、2群より3群がより後出的であることを示すもので実際には それぞれの群は一部で重複しつつ漸次的に変化すると考えられる。

5. 各時期の特徴

以上の検討結果から、1群から5群の形態分類は同時に時間的な変化と一致すると考えられる。したがって、1期から5期に読み替え各期の特徴を記載する。また、属性分析を行っていないが甕の器面調整や高杯の脚部など、口縁部の属性分析を基にした分析から読みとれる属性についても記載する。

1期 甕A1類を主体とする複合口縁甕に少数の単純口縁甕が伴う段階である。高杯の資料は

		複合口縁覺				単純口縁變							有段高	坏	· · ·	無段高坏							
		A 1 類	A 2 舞	A 3 繋	A 4 彩	B 1 第	B 2 蹇	B 3 舞	B 4 類	B 5 類	B 6 類	B7類	A 1 類	A 2 類	A 3 賞	B 1 類	B 2 類	B3類	T	_	B6#	B 7 類	B 8 類
1群	押平尾無遺跡 竪穴住居21 (最下層)	5	2	1		1	2						1				1	1					
	押平尾無遺跡 竪穴住居22 (床直)	2	1	l			1																
2群-	古御堂笹尾山遺跡 竪穴住居22(床直・焼土局)		2		1		1						1		2	1							
	青木遺跡 CSI03	1	1		2		1		1				1	4	1		2						
	古御堂笹尾山遺跡 竪穴4 (①層)	4	3	4			4	4						3				1	4				
	古御堂笹尾山遺跡 竪穴 4 (床直)				1	1	1							2				2					
	古御堂笹尾山遺跡 堅穴住居27 (①曆)		4	1	3		2	2						1	1		i						
	百塚第4遺跡 11号堅穴住居(床面付近)		1		4		2													有			
3群	百塚第7遺跡 24号竪穴住居(床直)		1				3												1				
	古御堂笹尾山遺跡 竪穴住居14(床直)				1		1					1								1			
	古御堂笹尾山遺跡 竪穴住居16(床直)						1		2	1										1	1		
	古御堂笹尾山遺跡 竪穴住居24 (床直)						1		1	ı		1											
4群	仁王堂遺跡 S I 10							I	1			1										1	
	茶烟第1遺跡 竪穴住居18(床直)									2		l											
	古御堂笹尾山遺跡 竪穴住居19(床直)									1	1											I	
5群	古御堂笹尾山遺跡 竪穴住居15(床直)										2	2											1
	仁王堂遺跡 竪穴住居12(床直)										1	2											
	福成早里遺跡 S K20]			1				3	2											

表1 一括資料における各タイプの出現頻度

少ないが、 $A 1 \cdot B 2 \cdot B 3$ 類が伴う。高杯 A 類の口径は20 cm 程度である。脚部は前中期的なもので、高さが $6 \sim 7$ cm、筒部が細いものである。

- 2期 単純口縁甕の比率が増加し、複合口縁甕と均衡するようになる。複合口縁甕は退化が進行し、A3·A4類が増加する。高杯A類はA2·A3類が多くなり、口径が18cm前後とやや小型化する。高杯B類はB1類からB4類がみられる。脚部は1期と同様であるが高さが5cmから6cmのものが多い。
- 3期 甕・高杯ともに資料が少ない時期である。複合口縁甕と単純口縁甕の比率は遺跡により変動があるが、単純口縁甕が主体となる遺構が比較的多いと考えられる。複合口縁はA4類が支配的となりその名残をとどめる程度となる。単純口縁甕はB2類が多く、B7類もこの時期からみられる。甕内面のケズリ調整は、口縁と胴部の屈曲部には及ばずわずかに下でとまるものが多い。高杯A類はほとんどなくB類のみとなり新たにB5類が加わる。脚部は旧来のものもあるが、筒部が若干太くなり高さも5cm前後と低くなる。また、杯部からハの字状に大きく広がるものが出現する。このタイプは比較的バラエティに富むが、いずれも高さ3cm前後と低い。
- 4期 分析対象資料には複合口縁甕はみられないが、少量は残存する。単純口縁甕には新たに B 5 類が出現し、B 4・B 5 類の存在が特徴的となる。つづく 5 期に一般化する B 6 類は わずかにこの段階でみられる。甕 B 5・B 6 類は、内面調整のケズリ痕が口縁部との屈曲部に及び、胴部上端まで強く削るため上端部(口縁との屈曲部)が鋭く屈曲する。こうした傾向は 5 期以降に引き続かれる。高杯は B 5・B 6・B 7 類のみがみられる。高杯 B 7 は、5 期の B 8 に引き継がれるタイプであるが、外面はケズリ調整である点が特徴的である。 脚部は、緩やかなハの字状に開き肉薄のものと、筒部が細く高さ 5 cm前後といった 3 期までにみられたもののほか、筒部が肉厚で高さが 5 cm程度のものが新たに出現する。

この時期は将来的に2時期に細分できるかもしれない。

第6章 特論

5期 甕はB6・B7類が大半となる。高杯はB8類がみられるが、出土数はわずかであり、 器種構成に占める土師器の高杯の割合は低いものと思われる。脚部はハの字状を呈し、高 さは4cm程度である。

6. 東伯耆地域との併行関係

東伯耆地域には古墳時代中期の集落遺跡が比較的多い。羽合町南谷大山遺跡のBSI11やBSI30、BSI13などは2期または3期に併行する時期の竪穴住居跡とみられるが、単純口縁甕は極めて少ない。 倉吉市夏谷遺跡では、3期前後に併行する時期の住居跡6棟を調査しているが、ここでも竪穴住居18号などで若干の単純口縁甕がみられる程度である。4期から5期に併行する時期の遺構が確認できないが、東伯耆地域においては単純口縁甕の普及は西伯耆よりかなり遅い6世紀中頃以降と考えられる。

7. 須恵器との併行関係

須恵器は変化の速度に差が想定されるとはいえ、地域を越えた併行関係が検討可能な資料である。 1期から5期は、須恵器が畿内での一括生産段階を脱し、地方窯が普及し全国的に生産が増加する段 階にあたるが、生活における器種構成に占める須恵器の割合はまだ低い。

1期の押平尾無遺跡竪穴住居21には須恵器を伴わない。2期には古御堂笹尾山遺跡竪穴4から樽形 腺、百塚第7遺跡SI18からは腺・蓋坏が出土しておりおおむねTK208併行と考えられる。このこと からみて、1期はおおむねTK73~TK216型式と併行関係にあると思われる。3期では百塚第7遺跡20・24号住居においておもに蓋坏や高坏が出土しておりTK47併行期とみられる。4期は古御堂笹尾山遺跡竪穴住居24出土蓋坏などからみてMT15型式前後とみられる。5期は古御堂笹尾山遺跡竪穴住居15、福成早里遺跡SK20出土資料からみておおむねTK43併行期と判断した。

7. まとめ

古墳時代中期末から後期にかけての土師器の型式変化は、複合口縁甕の衰退・消失と単純口縁甕の 普及と口縁形態の変化、高坏杯部の小型化・内湾化および脚部の低脚化に表徴される。その変化の速 度は、例えば東伯耆では単純口縁甕の出現が遅れるなど遺跡や地域において異なるものである。また、 変化は漸次的であり、たとえ一括資料であっても新旧のタイプが併存しており、時期判断は資料全体 を総合的にみて判断することが求められる。

今回は甕と高坏の口縁形態に注目したが、こうした属性分析は全体の器形、器面調整、法量、胎土など様々なファクターで行われるべきである。この作業の積み重ねが編年の基礎となる。今回提示した1期~5期は基礎作業のひとつである。また、茶畑遺跡群周辺の土器を対象としたため、古墳時代を通しての土器形態の変化を追うには至らなかった。これらは稿を改めて行いたい。 (岡野)

参考文献

- (1) 清水真一ほか編1977『青木遺跡発掘調査報告書Ⅱ C·D地区』青木遺跡発掘調査団
- (2) 清水真一ほか編1978『青木遺跡発掘調査報告書Ⅲ A·B·E·H地区』青木遺跡発掘調査団
- (3) 門脇豊文編1991『仁王堂遺跡』大山町教育委員会
- (4) 中山和之編1989『百塚53·105·106·107号墳、百塚第1·原田遺跡発掘調査報告書』淀江町教育委員会
- (5) 中山和之編1992『百塚古墳群発掘調査報告書I』淀江町教育委員会
- (6) 岩田文章編1993『百塚遺跡群Ⅱ』淀江町教育委員会
- (7) 岩田文章編1995『百塚遺跡群Ⅳ』淀江町教育委員会
- (8) 北浦弘人編1998『福成早里遺跡』鳥取県教育文化財団
- (9) 森下哲哉ほか編1996『夏谷遺跡発掘調査報告書』倉吉市教育委員会
- (10) 米田規人ほか編1993『南谷大山遺跡、南谷ヒジリ遺跡、南谷22·24~28号墳』鳥取県教育文化財団
- (11) 牧本哲雄編1994『南谷大山遺跡Ⅱ、南谷29号墳』鳥取県教育文化財団

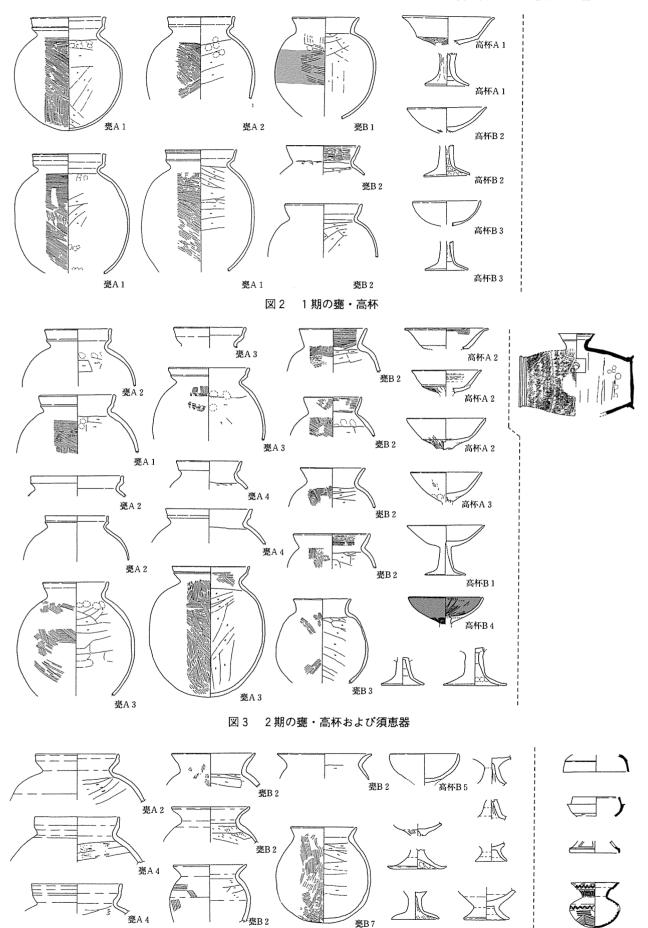
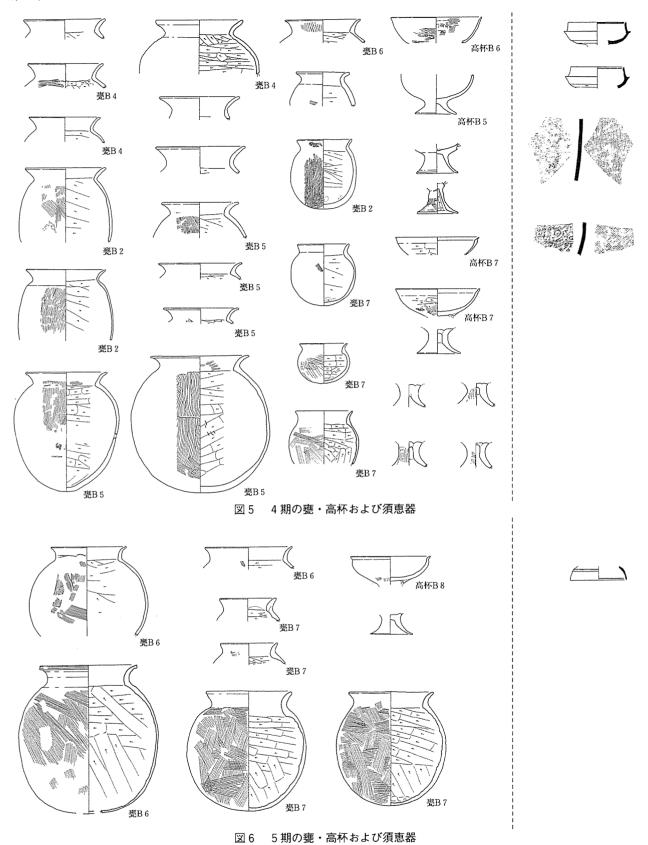


図4 3期の甕・高杯および須恵器



第7章 まとめ

茶畑遺跡群の概要と集落変遷

1. 茶畑遺跡群

茶畑遺跡群は、大山北麓の火山裾野面に立地する。日本海に向かい開削された幾筋もの浅い開削谷に挟まれた丘陵上に位置する。この丘陵周辺には本書が報告するところの茶畑第1遺跡、押平尾無遺跡、古御堂笹尾山遺跡、古御堂新林遺跡のほか、茶畑山道遺跡、茶畑第2遺跡、茶畑六反田遺跡、東高田遺跡など、弥生時代中期から古墳時代後期を主体とする集落遺跡が点在する。これらの集落跡は隣接する尾根や台地上に展開しており、一時期における遺構の密度が比較的高く、かつ断絶期はあるものの丘陵全体からみれば居住域の連続性が窺われる。こうしたことからこれらの遺構群は有機的繋がりを有する蓋然性が高いと判断し、総称として茶畑遺跡群を用いた。

2. 集落の変遷

茶畑遺跡群で最古の遺物は押平尾無遺跡で出土した後期旧石器とみられるものである。丘陵各地において落し穴状土坑の一部からは縄文時代前期の西川津式土器などが出土しており、丘陵上が生活域の一部であったとみられるが、本格的に居住域とされるのは弥生時代中期以降である。

弥生時代中期

前葉においては集落などの痕跡は確認されておらず、続く中葉から住居跡などが検出されている。その中心となるのが茶畑山道遺跡、茶畑六反田遺跡である。前者はSB-05のように独立棟持柱をもつ大型のものを含む掘立柱建物跡で構成され、集落の中では居住域以外の特別な空間であったと考えられている。

後葉でも引き続き茶畑山道遺跡では 遺構が密にあるが、末には希薄となる。 その時期、同遺跡では検出されていな い竪穴住居跡が、茶畑六反田遺跡にお いて小型の掘立柱建物跡とともにみら れる。さらに西へ0.6kmほどの押平弘 法堂遺跡では同時期の土壙群が、また 蛇ノ川を隔てた茶畑第1遺跡でも、尾 根斜面部を含む東側を中心に住居跡、 掘立柱建物跡が検出されている。

弥生時代後期

前~中葉にかけては押平尾無遺跡、

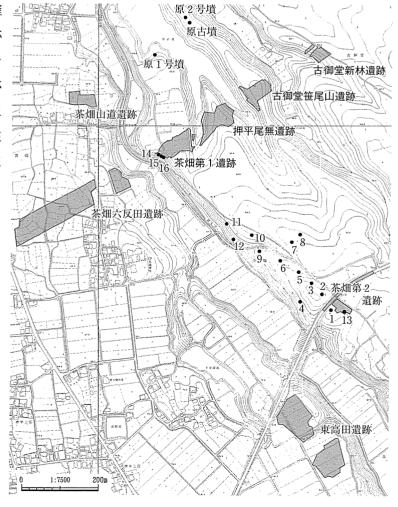
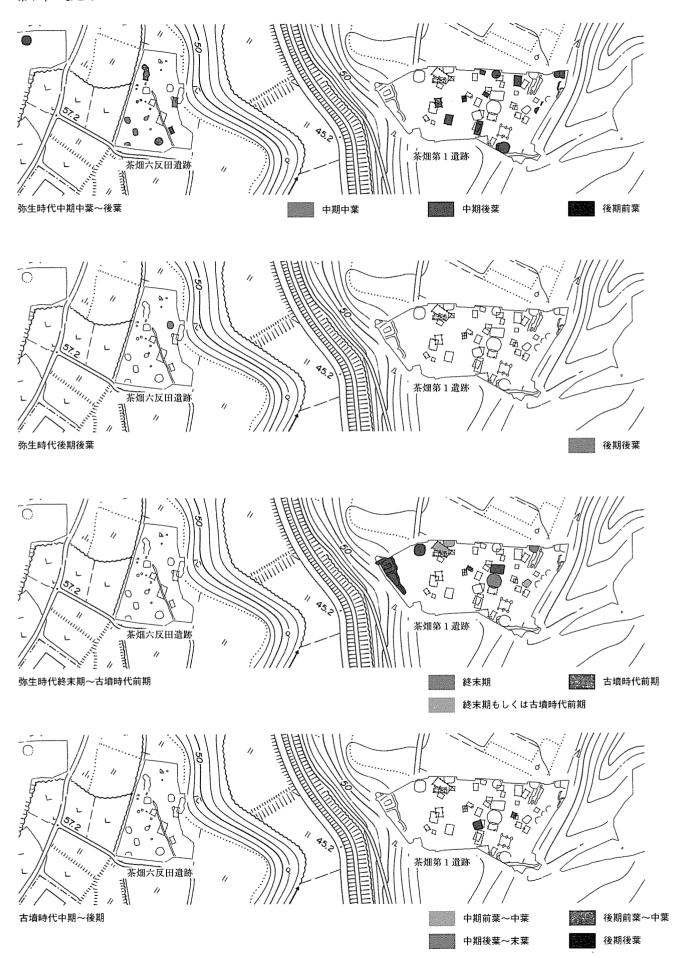
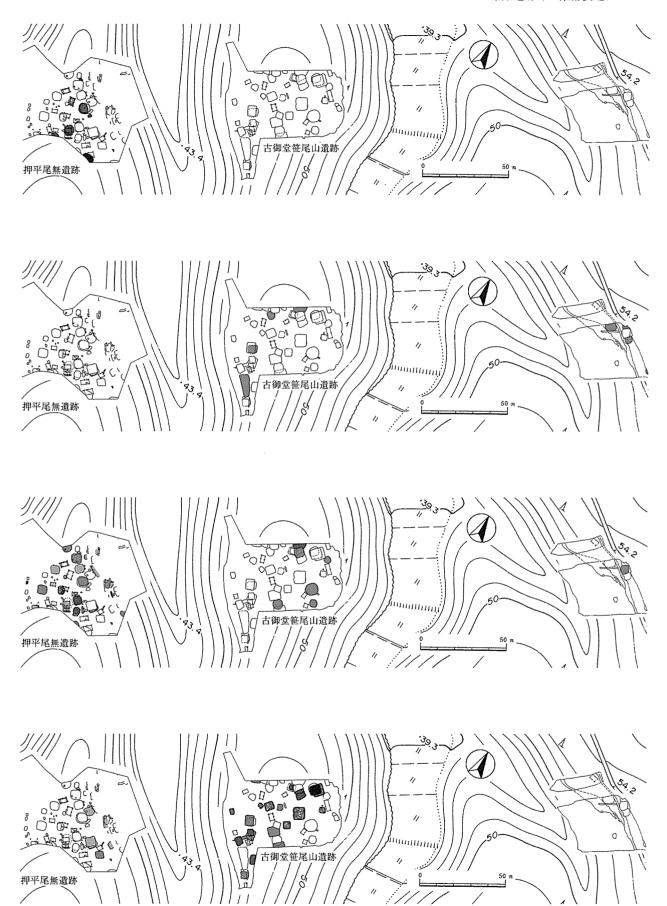


図1 茶畑遺跡群調査地配置図(数字は茶畑古墳群の番号)





第7章 まとめ

東高田遺跡、茶畑第2遺跡において数棟の住居跡がみつかっている程度で、全体的には検出されている遺構数が少ない段階である。しかし続く後葉になると、住居跡などの数は増加する。先の東高田、茶畑第2遺跡、さらに古御堂笹尾山、古御堂新林遺跡においてもまとまって住居跡が検出されている。一方で中期に遺構がみられた蛇ノ川流域では、茶畑六反田遺跡で1棟の住居がみつかっているのみで、遺構は希薄となる。

弥生時代終末期

終末期には茶畑山道遺跡、茶畑六反田遺跡を除くすべての遺跡で住居跡を確認しており、後期後葉に引き続き茶畑遺跡群の広い範囲に集落遺構がみられる時期である。押平尾無遺跡と古御堂笹尾山遺跡では前葉、後葉ともに3棟程度の竪穴住居跡と数棟の掘立柱建物で構成されるものと考えられる。掘立柱建物跡の時期比定は困難なものが多いが、茶畑第1遺跡の布掘の掘立柱建物10は遺構の切合い関係からみて終末期以前の遺構と判断される。茶畑第1遺跡と古御堂笹尾山遺跡では平面五角形および六角形の大型住居跡がみられる。焼失住居と認められるものは押平尾無遺跡で2棟がみられる。焼土層が住居中央寄りにみられ床面出土土器は皆無である。小屋組の材は残存しないが、一部でカヤと焼土がサンドイッチ状に出土した。

古墳時代前期

遺跡数、遺構数ともに減少する時期である。前葉の遺構は茶畑第1遺跡で1棟、押平尾無遺跡で3棟の住居跡のほか土坑、テラスが検出されている。茶畑第1遺跡の竪穴住居14は、平面方形でベッド 状遺構をもつ大型の住居跡である。

中葉の遺構は茶畑山道遺跡、茶畑第1遺跡でそれぞれ1棟の住居跡がみられる。茶畑第1遺跡では 中葉から後葉にかけて住居跡と同時に台地縁辺部に古墳が連続的に築造されるなど墓域と居住域が近 接して検出されている。後葉の遺構は古御堂笹尾山遺跡で1棟が確認されるのみである。

古墳時代中期

集落の形成はきわめて低調であるが、前葉から中葉にかけて押平尾無遺跡で竪穴住居数棟に掘立柱 建物が伴うものがみられる。後葉以降は古御堂笹尾山遺跡において再び居住域が形成され後期に継続 する。

古墳時代後期

茶畑第1遺跡、古御堂笹尾山遺跡のみに集落が形成される。茶畑第1遺跡は中葉に住居跡1棟、掘立柱建物1棟がみられるのみであるが、古御堂笹尾山遺跡では中期末から後期中葉にかけて継続的に居住域が形成される。一時期あたり4~5棟前後の住居跡が存在したものとみられるが、当該期に比

表1 茶畑遺跡群集落消長表 弥生時代 古墳時代 中期中期 後期 後期 後期 前期 前期 前期 中期 中期 中期 中期 後期 後期 後期 終末期 中葉 中葉 後葉 中葉|後葉 前葉 中葉 後葉 前葉 中葉 後葉 末 前葉 後葉 前葉 茶畑山道遺跡 茶畑六反田遺跡 2 3 茶畑第1遺跡 押平尾無遺跡 4 古御堂笹尾山遺跡 6 古御堂新林遺跡 7 東高田遺跡 8 茶畑第2遺跡

建物5棟以上

建物5棟未満

定される掘立柱建物は2棟のみでありきわめて少ない。後葉には住居跡は1棟のみとなり低調化する。 古御堂笹尾山遺跡では古墳時代中期後葉から後期中葉の焼失住居4棟を検出した。うち2棟は比較的 良好な状態で焼土炭化材が出土したが、弥生時代後期の焼失住居にみられる住居中央付近の焼土がみ られず、住居縁辺部付近にみられることが特徴的である。

古墳時代終末期以降

7~8世紀に比定される遺物が押平尾無遺跡、茶畑第1遺跡から出土しているほか、茶畑六反田遺跡では平安時代の条里制跡や水田跡、鎌倉時代の集落跡などの遺構が検出されている。

3. 集落構造

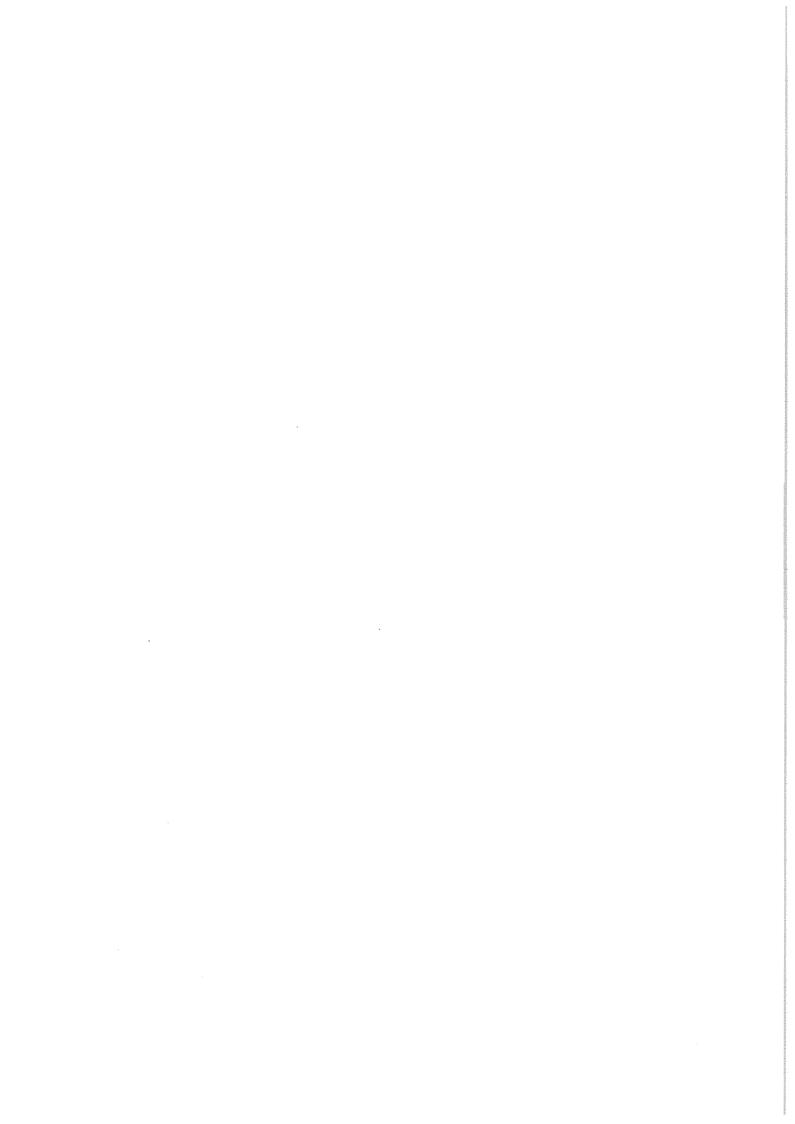
広大な丘陵地にトレンチ状に設定された調査区が大半であることから集落構造に関する情報は限定的である。竪穴住居跡で判断する限り一時期あたり3棟~5棟前後で構成されるものが多く、これは弥生時代中期から古墳時代後期に至るまでみられる。ただ、古墳時代後期中葉の茶畑第1遺跡のように周囲の遺構分布状況からみて竪穴住居と掘立柱建物の各1棟の構成と考えられるものもある。

掘立柱建物跡の時期比定は時間幅を持たせざるを得ないものが多く、周囲の遺構の状況から集落構造のプランを想定するしかない。押平尾無遺跡では、周囲の遺構分布状況などからみて、数棟の竪穴住居に2棟前後の掘立柱建物が伴う状況が窺える。茶畑遺跡群から西へ約4kmにある妻木晩田遺跡では弥生時代後期の居住単位として3~5棟の竪穴住居と掘立柱建物が想定されており、押平尾無遺跡の状況に類似する。一方、古墳時代中期後葉から後期の古御堂笹尾山遺跡では、竪穴住居24棟に対して同時期に比定される掘立柱建物は2棟のみであり、古墳時代後期以降の全国的な掘立柱建物の増加を考慮するとその比率は著しく低い。調査区外のエリアに集中しているのか、現状ではわからないが検討すべきポイントである。

茶畑山道遺跡では弥生時代中期中葉から後葉とみられる掘立柱建物群が検出されたが、調査区内に同時期の竪穴住居跡がみられない。掘立柱建物跡のひとつは独立棟持柱をもつ大型のものである。この状況は茶畑第1遺跡でも類似しており、弥生時代中期後葉および終末期から古墳時代前期前葉にかけて、掘立柱建物が数的にも規模的にも卓越する。すなわち、中期後葉では4棟前後の竪穴住居に対して、独立棟持柱をもつ大型のものを含めて6棟以上の掘立柱建物が想定されている。また、布掘の大型掘立柱建物10は遺構の切合い関係から弥生時代終末期以前、階段状の掘り方をもつ掘立柱建物11は中期後葉から古墳時代前期の時間幅が想定される。こうした大型掘立柱建物の卓越は、数棟の竪穴住居と掘立柱建物で構成される他の遺跡とは大きく異なるものであり、茶畑山道遺跡と茶畑第1遺跡の大きな特徴である。この点からみて、両遺跡は少なくとも一般構成員の居住域とは考えがたく、有力者の住居か宗教的な施設かはわからないが、集落内において特殊な空間を形成したエリアと考えられる。

まとめると、弥生時代中期後葉および終末期から古墳時代前期にかけては、竪穴住居数棟に掘立柱建物がともなう一群と、大型掘立柱建物を含む掘立柱建物数棟に少数の竪穴住居が伴う一群がある。 古墳時代中期から後期にかけては従来からの竪穴住居数棟に掘立柱建物をともなうものが引き継がれるが、竪穴住居、掘立柱建物各1棟ずつで構成されるものや、ほとんどが竪穴住居で構成されるとみられるものもありばらつきがみられる。

以上のように部分的ではあるが、弥生~古墳時代にかけての集落構造、および変遷が窺える資料が 得られた。今後、他地域などとの比較をする上でも貴重なものといえよう。 (中森・岡野)







2 遺跡周辺の地形 (北東から)

図版2 古御堂笹尾山遺跡



1 竪穴住居1 (南から)



2 竪穴住居 2 (南東から)



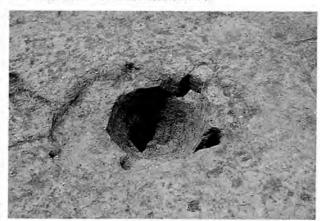
1 竪穴住居1 土層断面(南から)



2 竪穴住居 2 土層断面(南東から)



3 竪穴住居 2 床面遺物出土状況(北から)

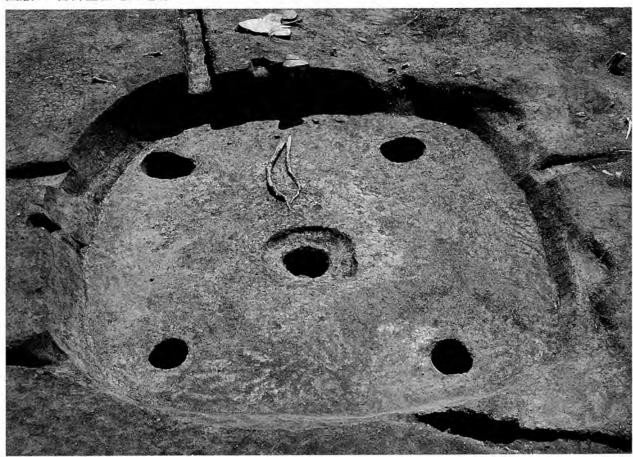


4 竪穴住居 2 P5 完据状況(北から)



5 竪穴住居 2 P5遺物出土状況(北から)

図版4 古御堂笹尾山遺跡



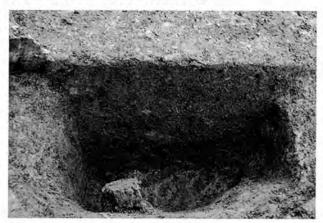
1 竪穴住居 3 (北東から)



2 竪穴住居 4 (北西から)



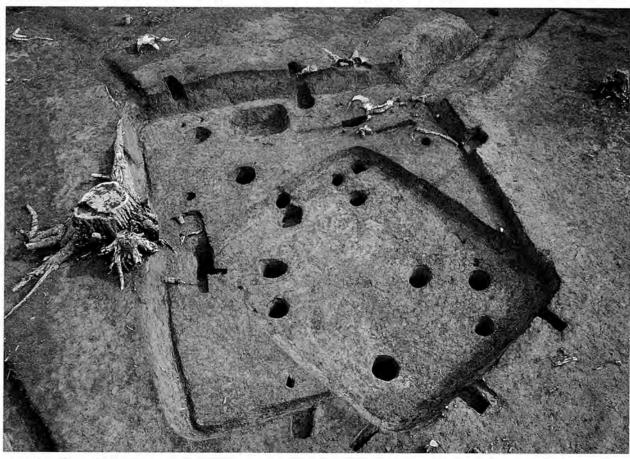
1 竪穴住居 3 土層断面(北西から)



2 竪穴住居 4 P5 土層断面(北西から)



3 竪穴住居 5 (南から)

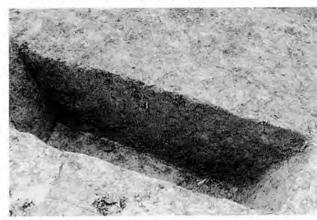


4 竪穴住居13 (北から)

図版6 古御堂笹尾山遺跡



竪穴住居13 土層断面(西から)



2 竪穴住居13 P6土層断面(南西から)



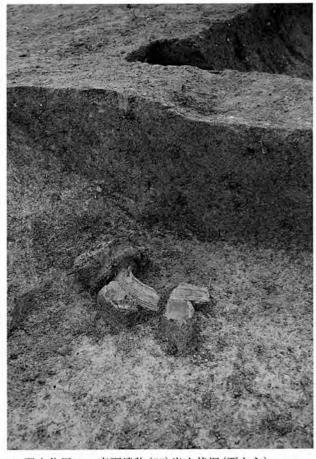
4 竪穴住居13 排水溝土層断面(北西から)



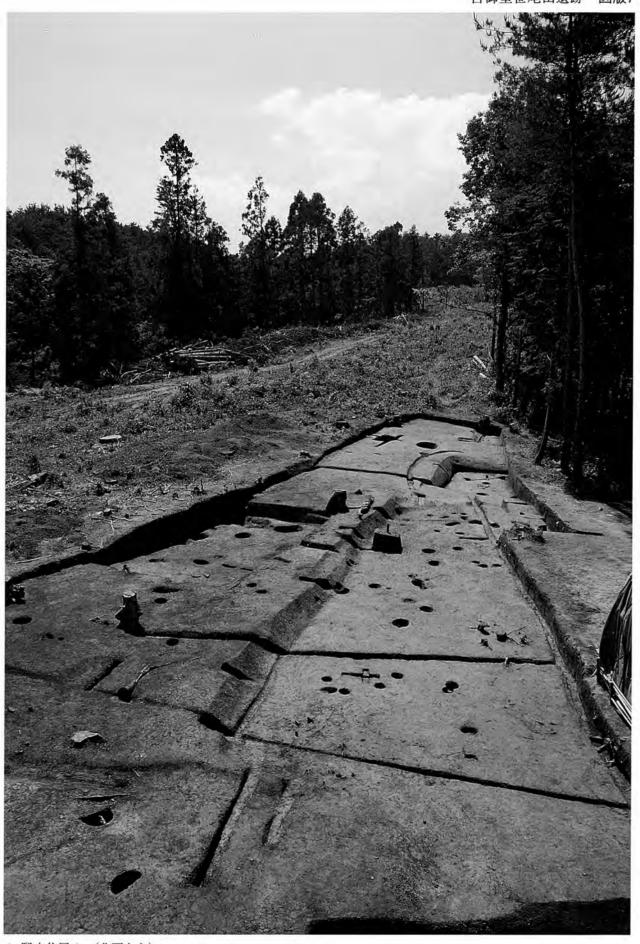
5 竪穴住居 6 土層断面(南西から)



3 竪穴住居13 排水溝完掘状況(北から)



6 竪穴住居 6 床面遺物(55)出土状況(西から)



1 竪穴住居 6 (北西から)

図版8 古御堂笹尾山遺跡



1 竪穴住居 9 (北西から)



土層断面(北東から)



床面遺物(72)出土状況(北から)



4 竪穴住居 8 (北東から)



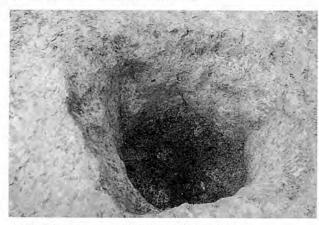
5 竪穴住居10 床面遺物出土状況(西から)



1 竪穴住居10a (北西から)



2 竪穴住居10 土層断面(東から)



3 竪穴住居10 P7炭化物出土状況(東から)



4 竪穴住居10b (南西から)

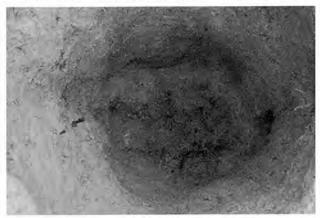
図版10 古御堂笹尾山遺跡



1 竪穴住居11 床面遺物(124・126)出土状況(東から)



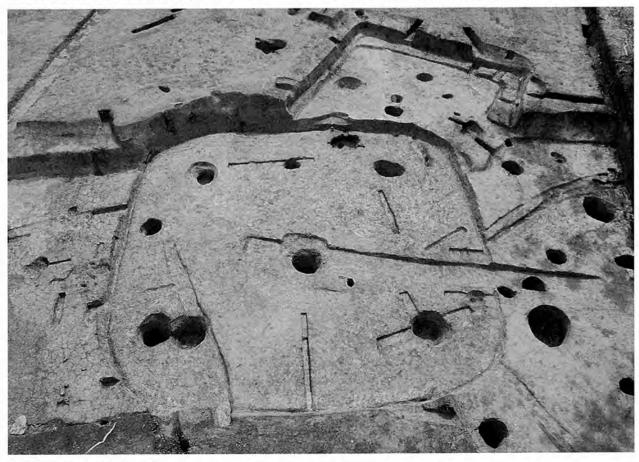
2 竪穴住居11 土層断面(南から)



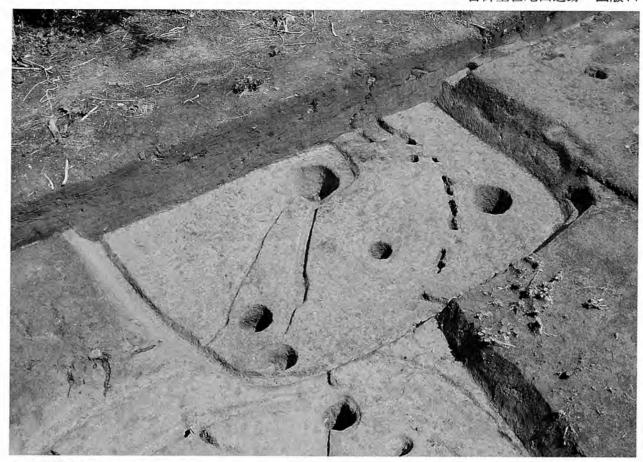
3 竪穴住居11 P5炭化物出土状況(南西から)



4 竪穴住居11 P5 完掘状況(南から)



5 竪穴住居11 (北東から)



1 竪穴住居12 (南から)



2 竪穴住居12 土層断面(北西から)



3 竪穴住居12 土層断面(南東から)



4 掘立柱建物1 (北西から)

図版12 古御堂笹尾山遺跡



1 掘立柱建物 2 (北西から)



5 掘立柱建物 3 (北から)



2 掘立柱建物 2 P1土層断面(南西から)



6 掘立柱建物 4 P1 完掘状況(東から)



3 掘立柱建物 2 P2土層断面(南西から)



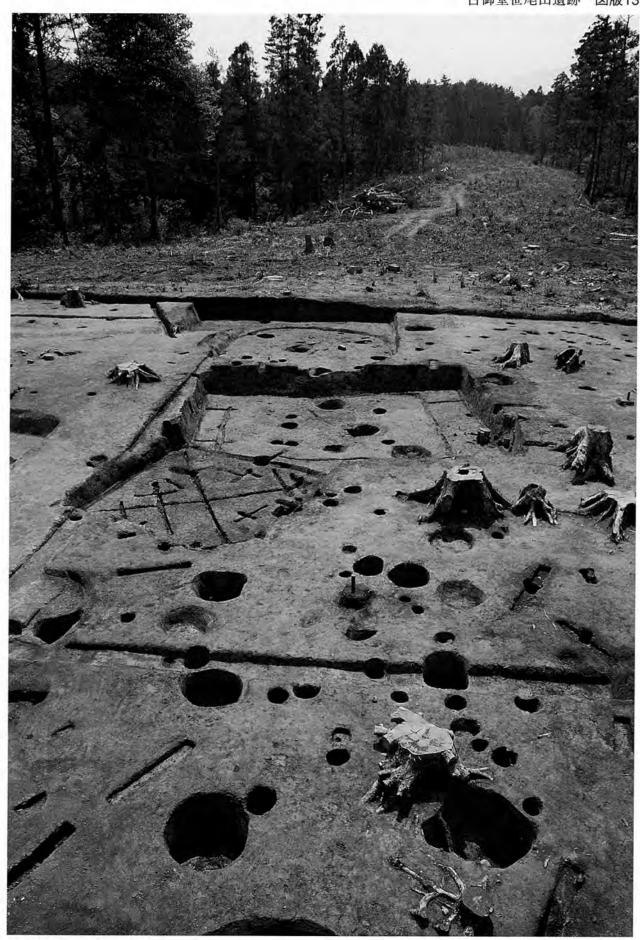
7 掘立柱建物 4 P3土層断面(南西から)



4 掘立柱建物 3 P6土層断面(北西から)



8 掘立柱建物 3 P2·3 出土桃核



掘立柱建物 4 (北東から)

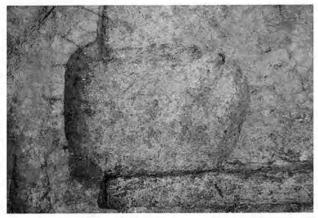
図版14 古御堂笹尾山遺跡



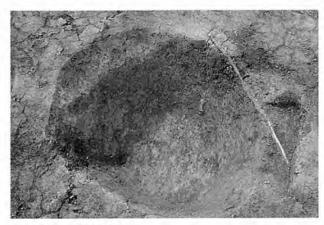
1 掘立柱建物 5 (北から)



2 掘立柱建物 7 P3遺物出土状況 (南から)



3 土坑1 (北東から)



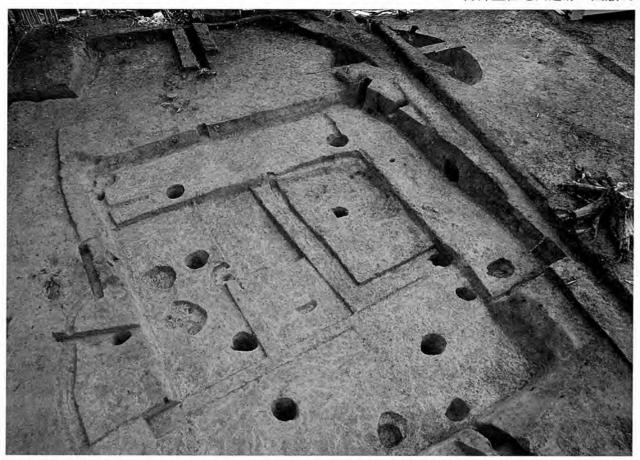
4 土坑5 (南から)



5 土坑8 (北から)



6 溝1 (南東から)



1 竪穴住居14 (南西から)



2 竪穴住居14 P5 完掘状況(西から)



3 竪穴住居14 土層断面(南西から)



4 竪穴住居14 床面遺物(155·157)出土状況(北東から) 5 竪穴住居14 床面遺物(156·158)出土状況(北から)



図版16 古御堂笹尾山遺跡



1 竪穴住居14 床面土器(154)出土状況



2 竪穴住居15 検出状況(南から)



3 竪穴住居15 地床炉完掘状況(北東から)



4 竪穴住居15 (北東から)



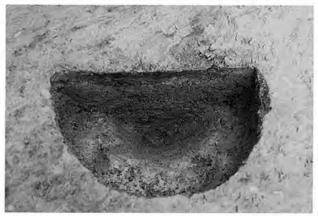
1 竪穴住居15 土層断面(南西から)



2 竪穴住居15 床面施設検出状況(北東から)



3 竪穴住居15 床面遺物(165・167)出土状況(北から)



4 竪穴住居15 P5土層断面(南から)



5 竪穴住居15 床面土器(168)出土状況(北から)



6 竪穴住居15 床面遺物(171)出土状況(西から)

図版18 古御堂笹尾山遺跡



1 竪穴住居16 (北東から)



2 竪穴住居16 遺物出土状況(南から)



3 竪穴住居16 P6遺物(178·179)出土状況(西から)



4 竪穴住居16 床面土器(180)出土状況(南から)



5 竪穴住居16 地床炉完掘状況(北から)



1 竪穴住居17・18 (北東から)



2 竪穴住居18 炭化材出土状況(北東から)

図版20 古御堂笹尾山遺跡



1 竪穴住居18 勾玉(S22)出土状況(南から)



3 竪穴住居18 炭化材出土状況(南西から)



2 竪穴住居18 P1炭化材出土状況(西から)



4 竪穴住居18 炭化材出土状況(南西から)



5 竪穴住居19 (北から)



1 竪穴住居19 P5·P24完掘状況(西から)



4 竪穴住居19 床面遺物出土状況(北から)



2 竪穴住居19 土層断面(北西から)



3 竪穴住居19 遺物出土状況(南西から)

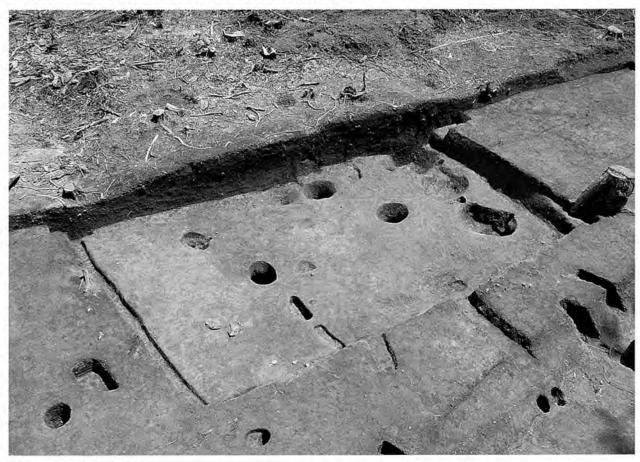


5 竪穴住居19 P5土層断面、P24遺物出土状況(西から)

図版22 古御堂笹尾山遺跡



1 竪穴住居19a P24遺物(216·220·221)出土状況(北西から)



2 竪穴住居20 (西から)



1 竪穴住居22 (北から)



2 竪穴住居22 土層断面(西から)



3 竪穴住居22 土層断面(北から)

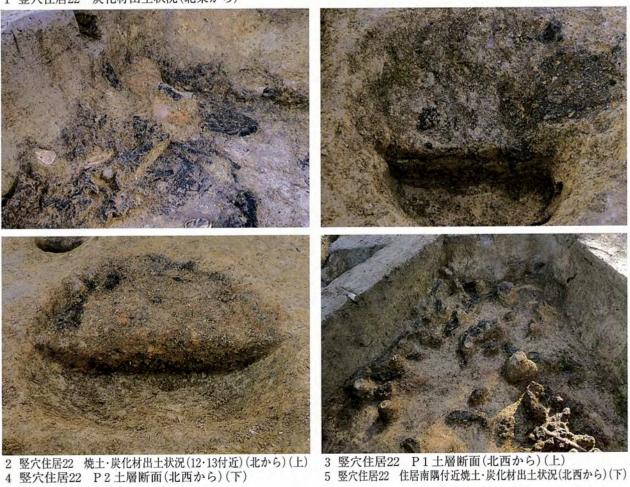


4 竪穴住居22 土層断面(西から)

図版24 古御堂笹尾山遺跡



1 竪穴住居22 炭化材出土状況(北東から)



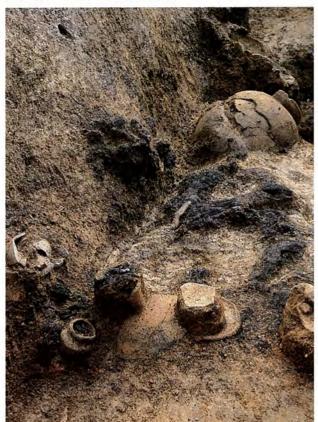


1 竪穴住居22 住居中央付近炭化材出土状況(北から)



2 竪穴住居22 炭化材出土状況(北から)

図版26 古御堂笹尾山遺跡



1 竪穴住居22 遺物出土状況(北から)



2 竪穴住居22 P1周辺遺物出土状況(北から)



3 竪穴住居22 遺物(249)出土状況(北西から)



4 竪穴住居22 壁面カヤ材出土状況(南西から)



5 竪穴住居22 炭化材(N-N')出土状況(北西から)



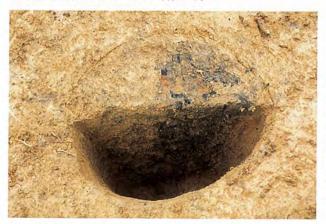
1 竪穴住居23 (北から)



2 竪穴住居23 P1・5・6(北から)



3 竪穴住居23 P1土層断面(西から)



4 竪穴住居23 P2土層断面(西から)



5 竪穴住居23 P4土層断面(西から)

図版28 古御堂笹尾山遺跡



1 竪穴住居23 炭化材出土状況(西から)



2 竪穴住居23 板材(No.23·26)出土状況(北から)



1 竪穴住居23 焼土・炭化材出土状況(炭化材13~23・26周辺) (東から)

図版30 古御堂笹尾山遺跡



1 竪穴住居23 土層断面(西から)



4 竪穴住居23 カヤ(炭化材34)出土状況(東から)



2 竪穴住居23 土層断面(西から)



5 竪穴住居23 カヤ(炭化材18)出土状況(東から)

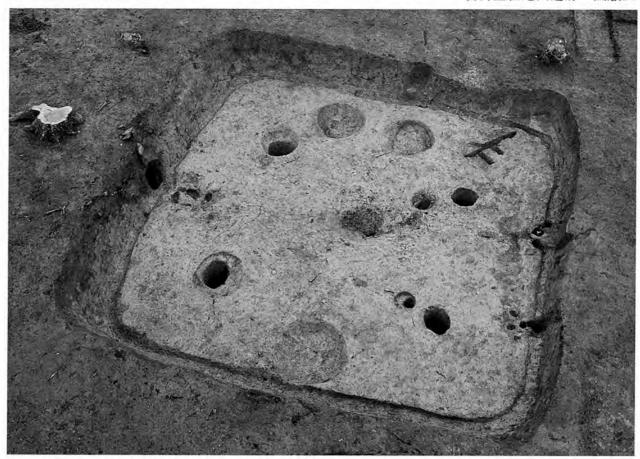


3 竪穴住居23 炭化材出土状況(北東から)





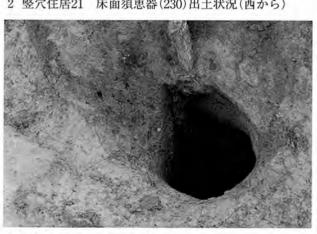
6 竪穴住居23 板材(炭化材26)断ちわり状況(東から) 7 竪穴住居23 板材(炭化材26)出土状況(北から)



1 竪穴住居21 (北東から)



床面須恵器(230)出土状況(西から)



4 竪穴住居21 P6(北から)



3 竪穴住居21 床面須恵器(231)出土状況(西から)



5 竪穴住居21 土層断面(南から)

図版32 古御堂笹尾山遺跡



1 竪穴住居24 (北から)



2 竪穴住居24 覆土中遺物出土状況(北西から)



4 竪穴住居24 土器(285)出土状況(北西から)



3 竪穴住居24 床面土器(283)出土状況(北から)



5 竪穴住居24 P6 完掘状況(西から)



1 竪穴住居25・26 (東から)



2 竪穴住居25 P1(北から)



3 竪穴住居25 土層断面(東から)



4 竪穴住居26 土層断面(東から)



5 竪穴住居26 P1遺物出土状況(北東から)

図版34 古御堂笹尾山遺跡



1 竪穴住居27 (北東から)



2 竪穴住居27 ④層遺物出土状況(北から)

古御堂笹尾山遺跡 図版35



1 竪穴住居27 ④層炭化材出土状況(東から)



2 竪穴住居27 P7(南西から)



3 竪穴住居28 (北から)



4 竪穴住居29 P5 炭化物出土状況(北から)



5 竪穴住居29 (北西から)

図版36 古御堂笹尾山遺跡



1 竪穴住居30・31 (東から)



2 竪穴住居30 土器(389)出土状況(南東から)





4 竪穴2 (南から)



5 竪穴2 土層断面(南から)



1 竪穴住居32・竪穴1 (北西から)



2 竪穴住居32 土層断面(南東から)



4 竪穴3 (北から)



3 竪穴1 (南東から)



5 竪穴住居33・34 土層断面(南から)

図版38 古御堂笹尾山遺跡



1 竪穴住居33・34 (北東から)



3 竪穴4 (北東から)



2 竪穴5 (北から)



4 竪穴 4 遺物(461)出土状況(南東から)



5 竪穴4 ①層遺物出土状況(南東から)



1 竪穴4 床面遺物出土状況(北西から)



住居南東隅炭化材出土状況(西から)



4 竪穴6 (西から)

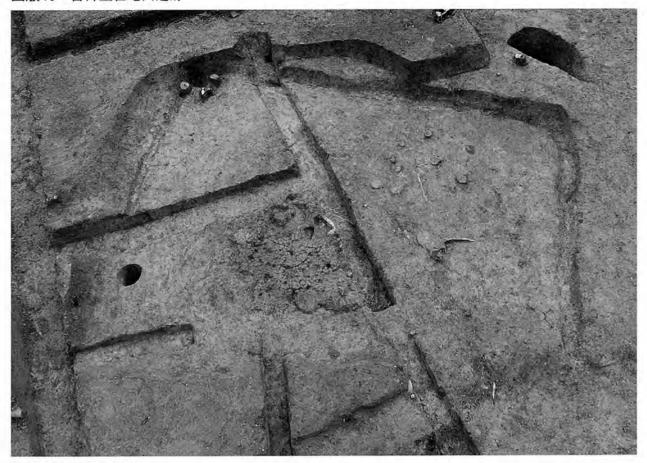


地床炉検出状況(南から) 3 竪穴 6



5 竪穴 6 土層断面(北から)

図版40 古御堂笹尾山遺跡



1 竪穴7 (北西から)



2 竪穴 6 遺物出土状況(南東から)

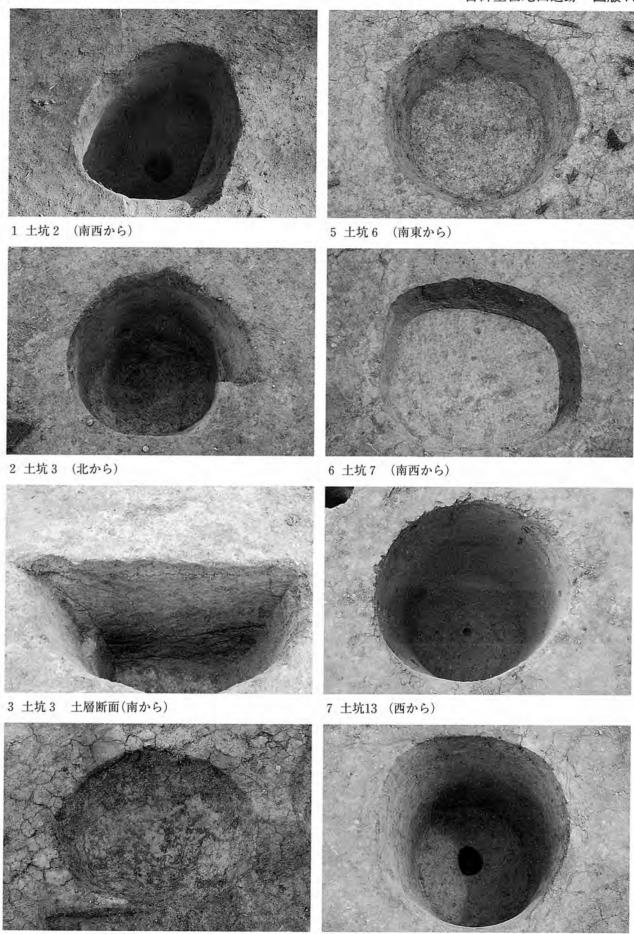




3 竪穴7 (北東から)

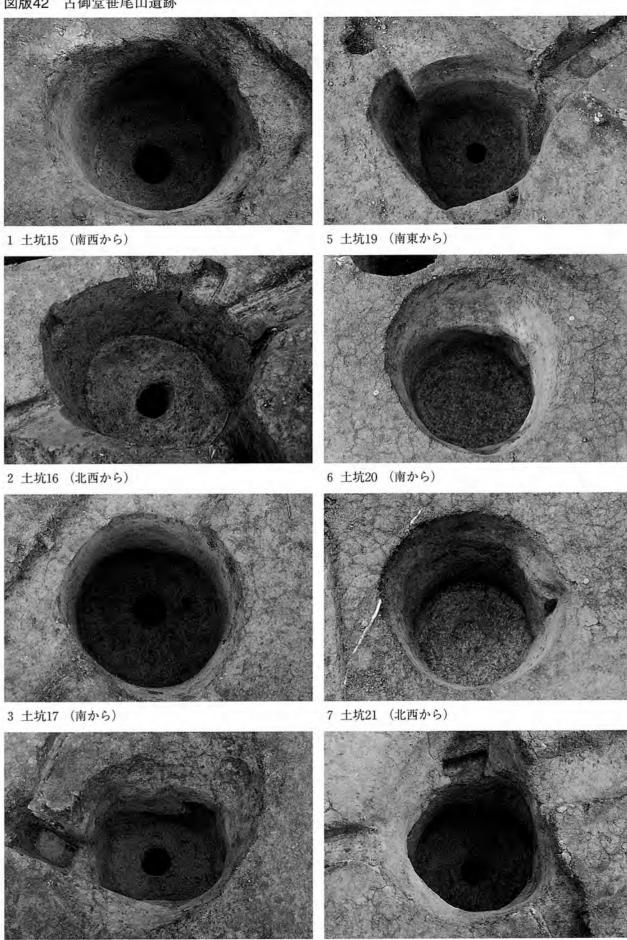


5 竪穴8 土層断面(南から)



4 土坑 4 (南から) 8 土坑14 (南西から)

図版42 古御堂笹尾山遺跡



4 土坑18 (南から)

8 土坑22 (北西から)



1 土坑23 (西から)



3 土坑25 (北西から)



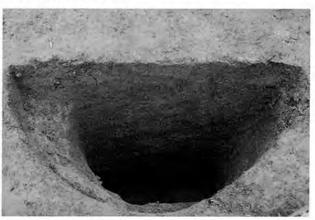
2 土坑24 (北西から)



4 土坑26 (北東から)



5 土坑23 土層断面(東から)



7 土坑25 土層断面(西から)



6 土坑24 土層断面(南東から)



8 土坑26 土層断面(西から)

図版44 古御堂笹尾山遺跡



1 土坑27 (北東から)



5 土坑29 土層断面(南西から)



2 土坑28 (北西から)



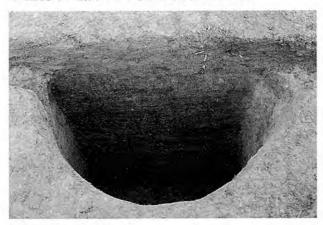
6 土坑30 土層断面(東から)



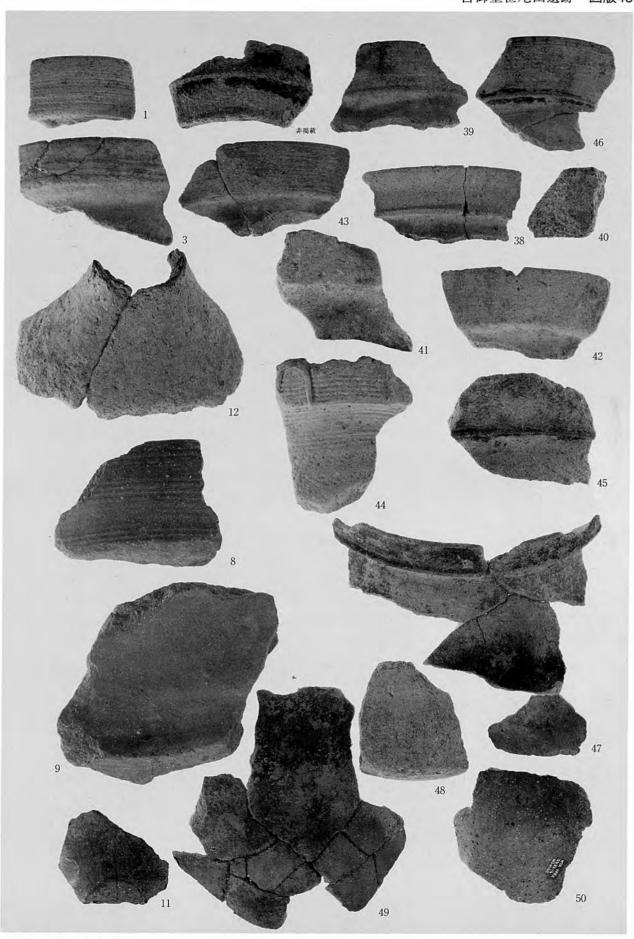
3 土坑28 底面ピット検出状況(南西から)



7 土坑31 (南西から)

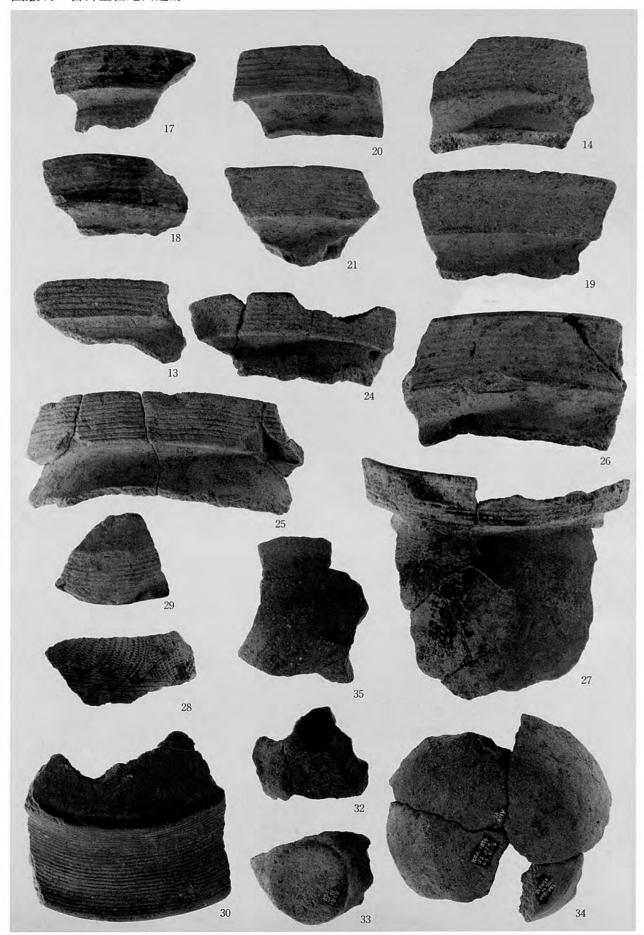


4 土坑28 (南東から)



竪穴住居1・3出土遺物

図版46 古御堂笹尾山遺跡



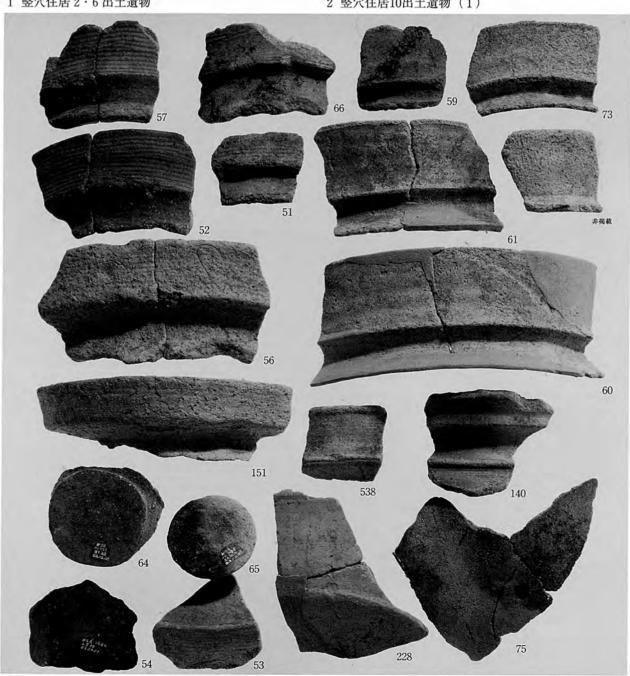
竪穴住居2出土遺物(1)



1 竪穴住居 2・6 出土遺物

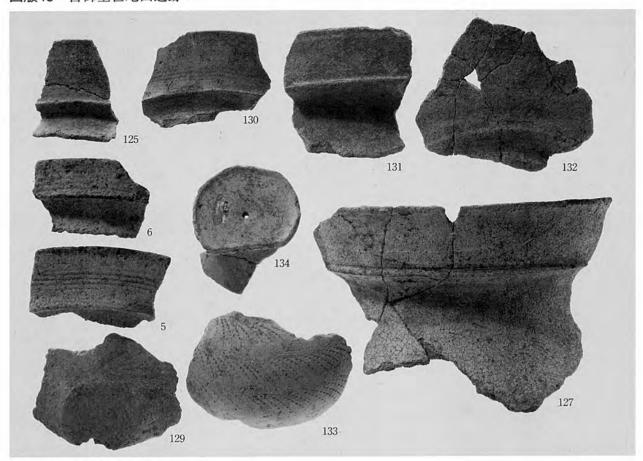


2 竪穴住居10出土遺物 (1)

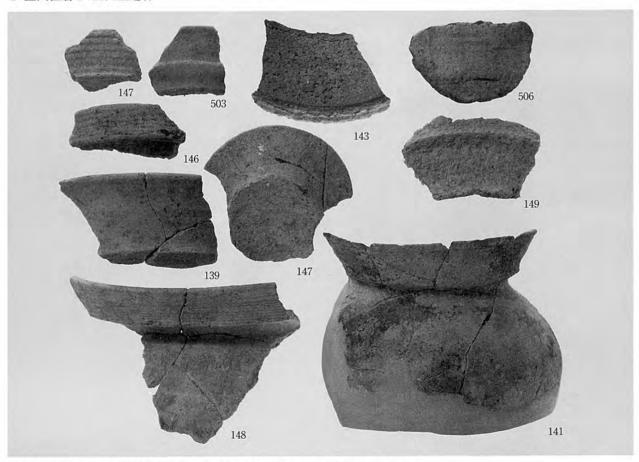


3 竪穴住居 5 · 6 · 9 · 12 · 20、遺構外出土遺物

図版48 古御堂笹尾山遺跡



1 竪穴住居 1·11出土遺物



2 竪穴住居11・12、掘立柱建物 6、土坑 5・14、溝 1、ピット出土遺物



1 竪穴住居16、竪穴4出土遺物

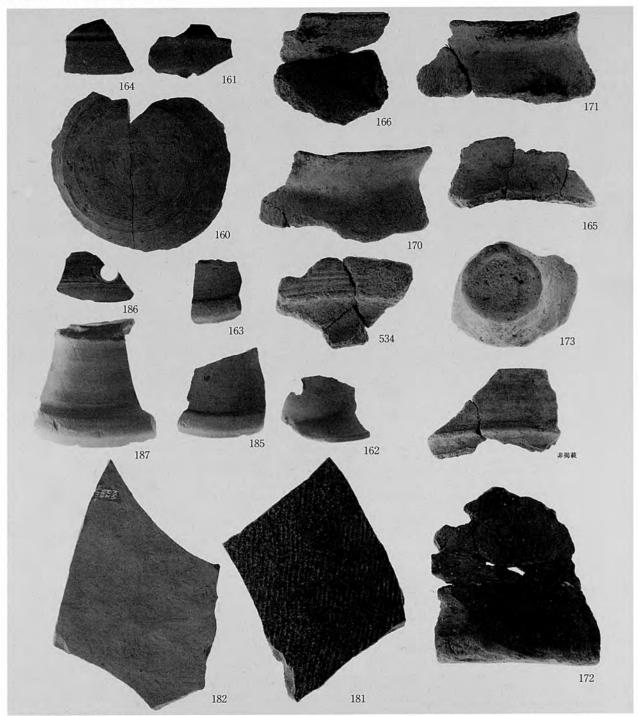


2 竪穴住居15出土遺物

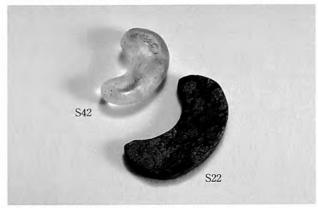


3 竪穴住居14出土遺物

図版50 古御堂笹尾山遺跡



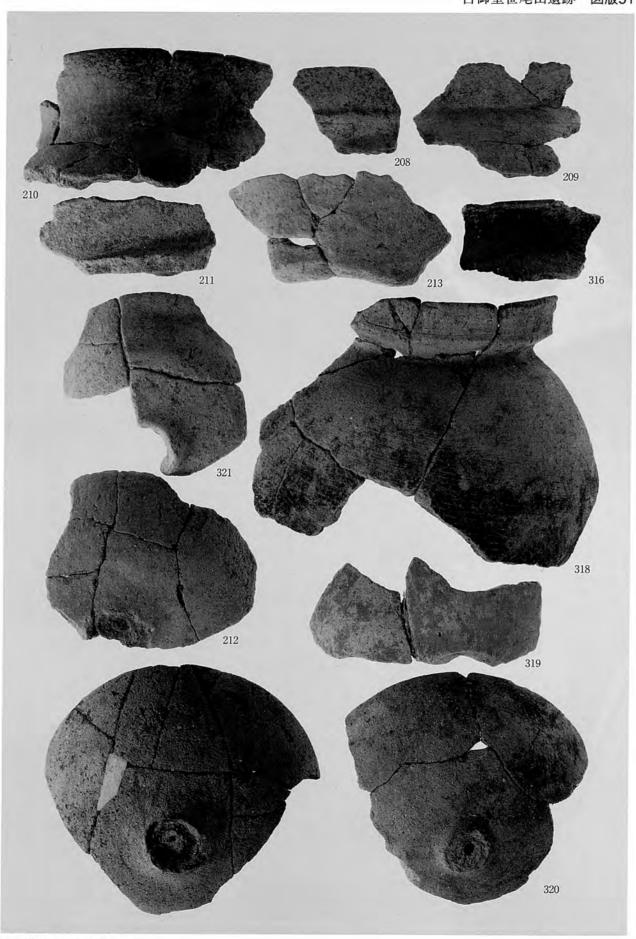
1 竪穴住居15·16出土遺物



2 竪穴住居18、竪穴7出土勾玉



3 竪穴住居21出土遺物



竪穴住居18·25·26出土遺物

図版52 古御堂笹尾山遺跡



1 竪穴住居22出土遺物



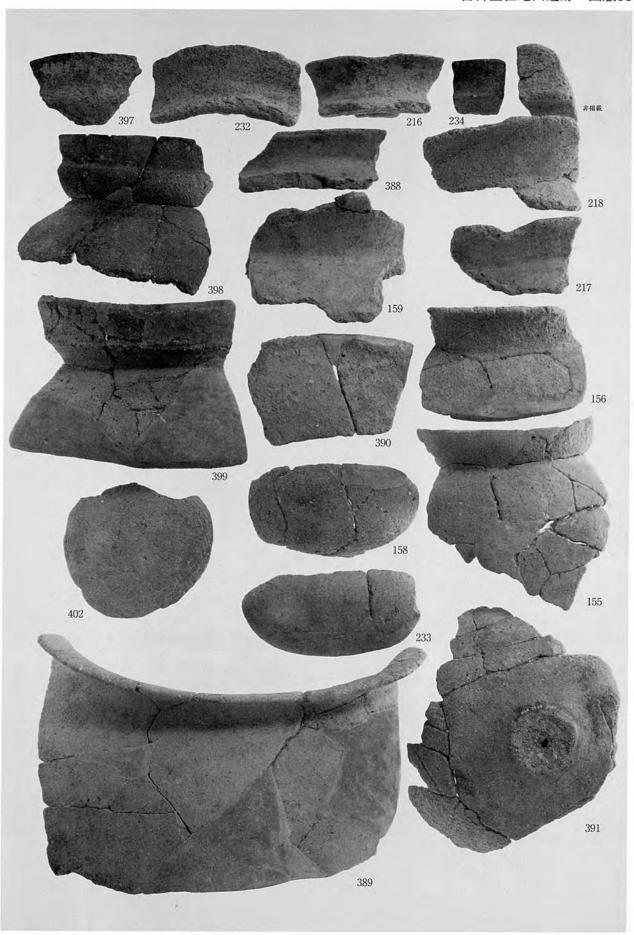
2 竪穴住居19出土遺物



3 竪穴住居23·27出土遺物

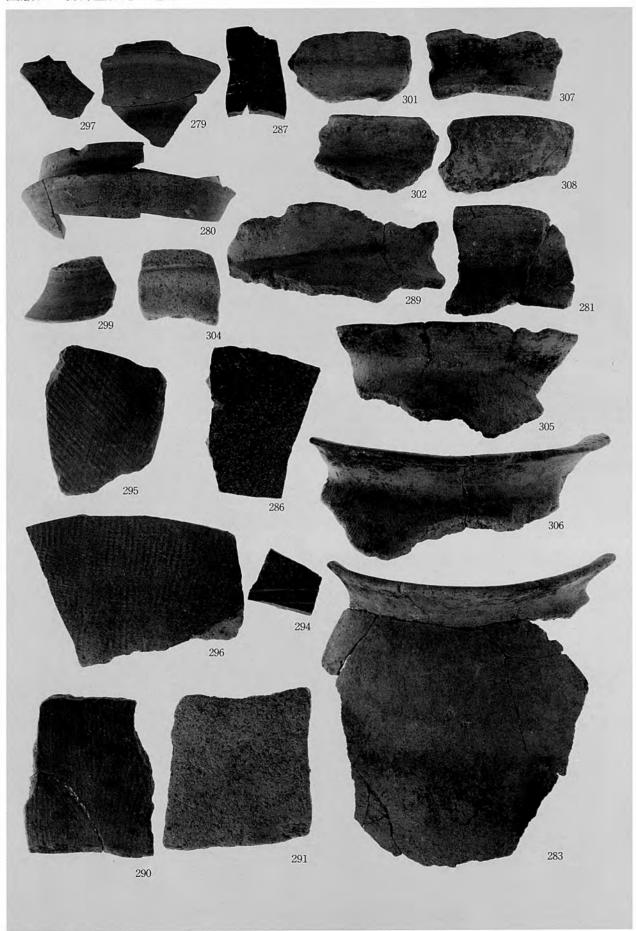


4 竪穴住居25·33出土遺物

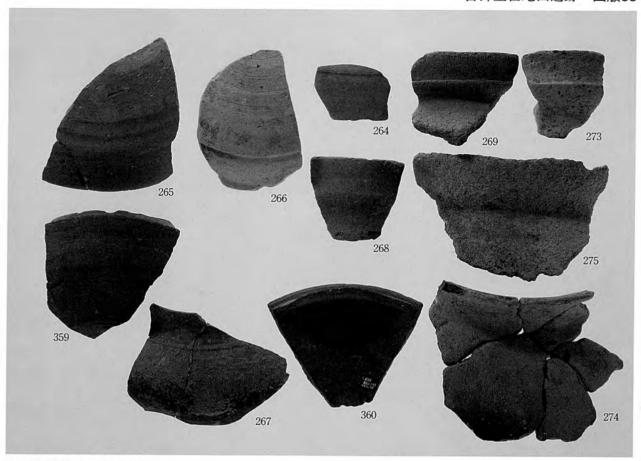


竪穴住居14·19·21·30·31·34出土遺物

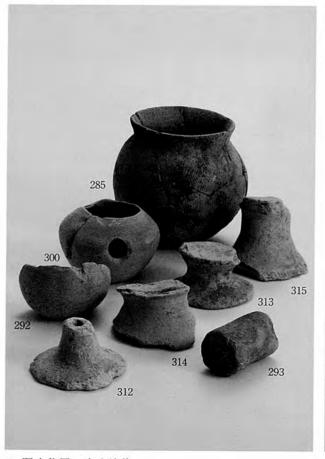
図版54 古御堂笹尾山遺跡



竪穴住居24出土遺物



1 竪穴住居23·27出土遺物

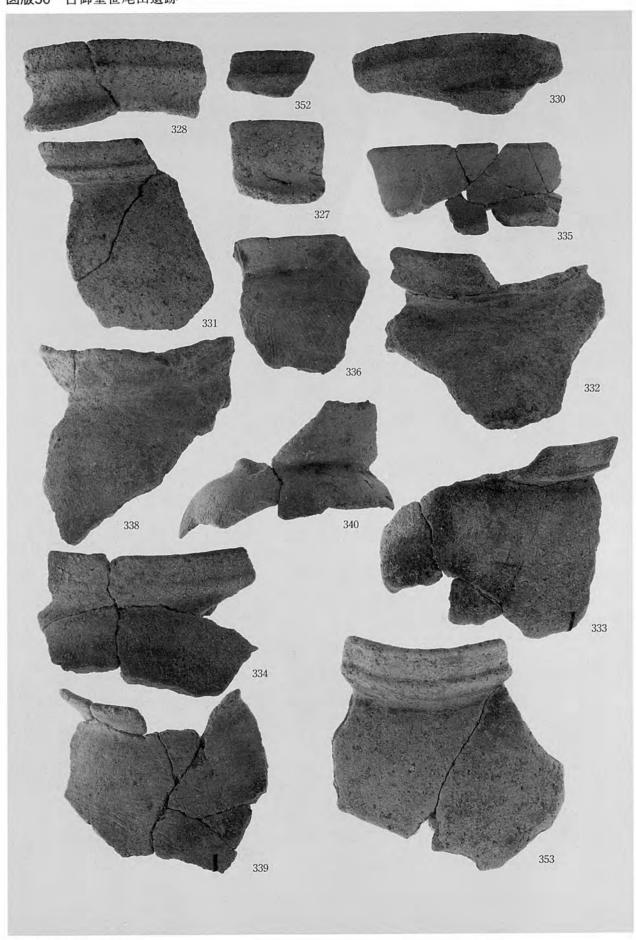


2 竪穴住居24出土遺物

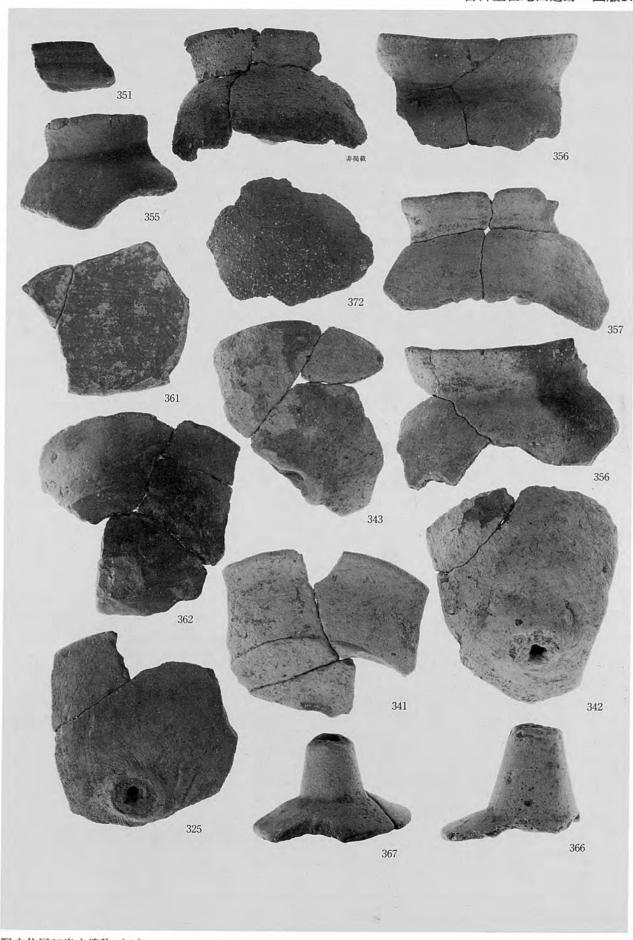


3 竪穴住居27出土遺物 (1)

図版56 古御堂笹尾山遺跡

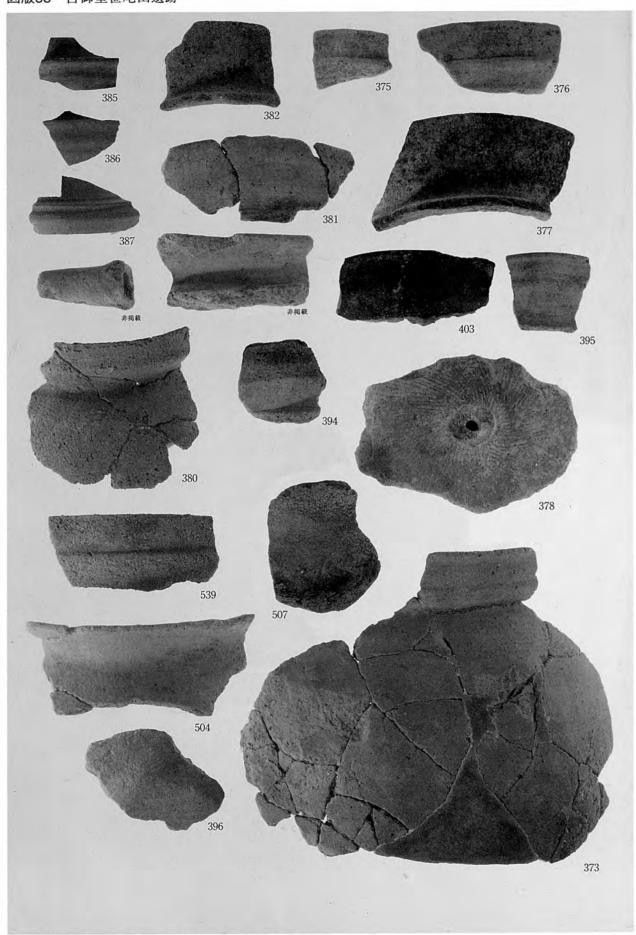


竪穴住居27出土遺物 (2)

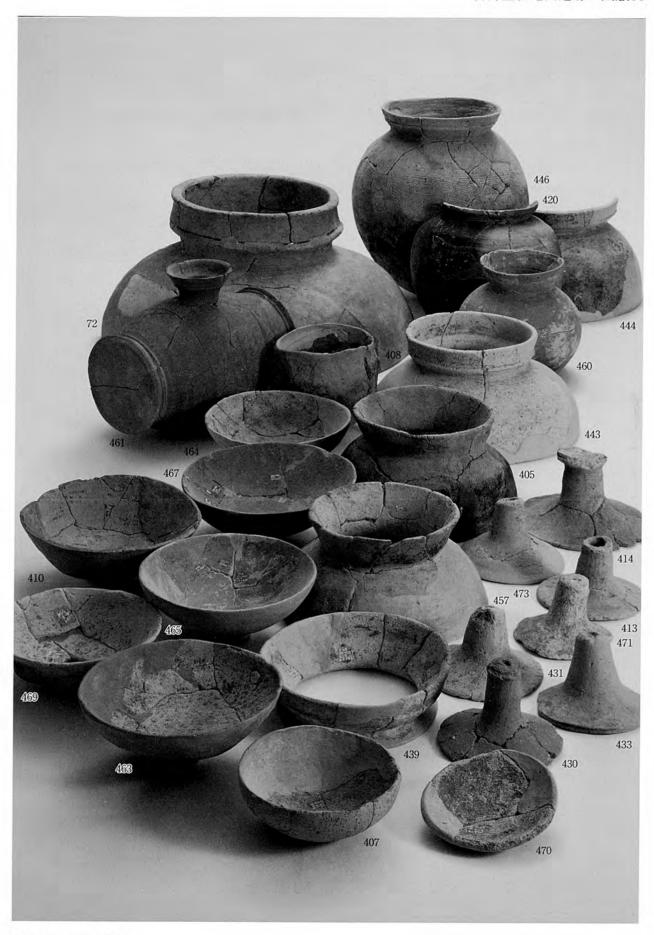


竪穴住居27出土遺物 (3)

図版58 古御堂笹尾山遺跡



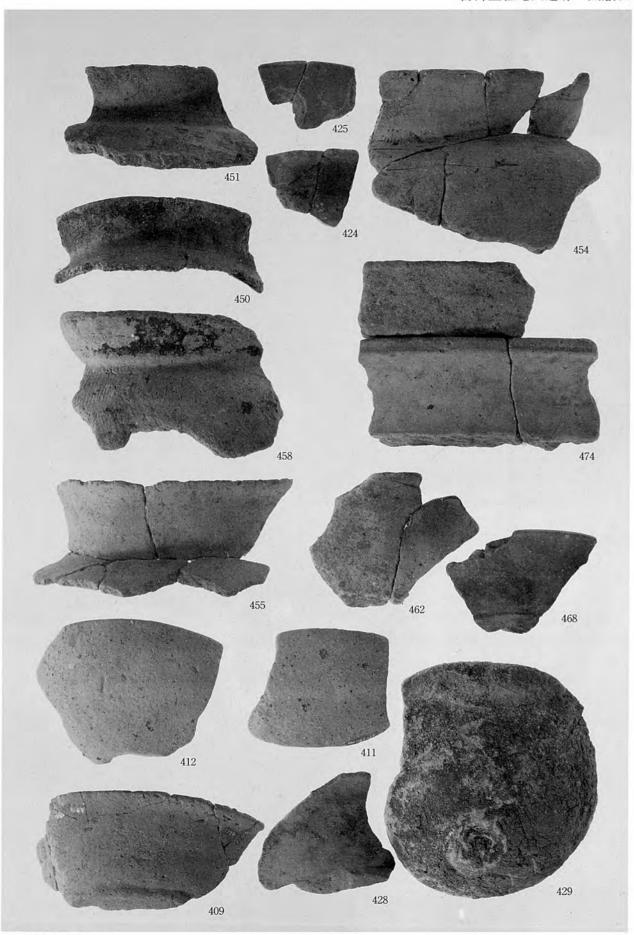
竪穴住居28・29・32、竪穴1、土坑29、ピット出土遺物



竪穴4出土遺物(1)



竪穴4出土遺物(2)



竪穴4出土遺物(3)

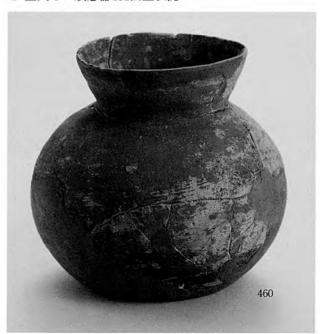
図版62 古御堂笹尾山遺跡



1 竪穴4出土遺物(4)



2 竪穴 4 須恵器461出土状況



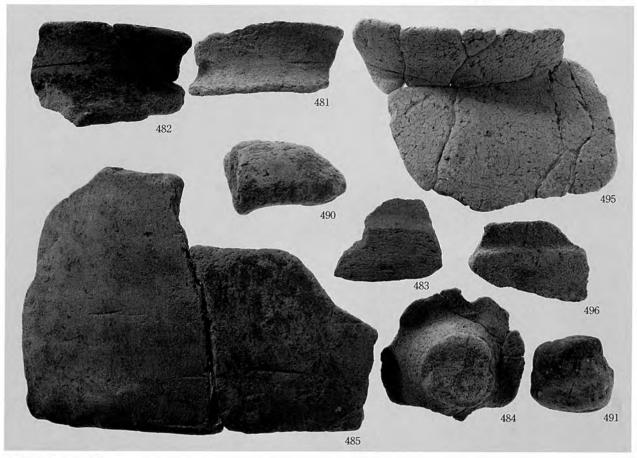
3 竪穴 4 出土遺物 (5)



4 竪穴 4 出土遺物 (6)



5 竪穴 7·8 出土遺物

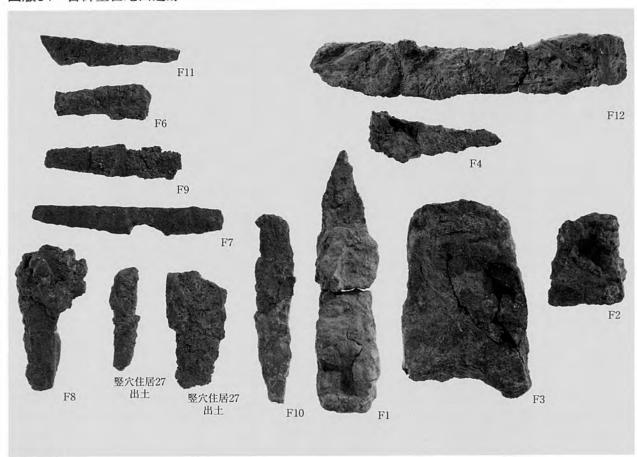


1 竪穴 6 出土遺物



2 砥石

図版64 古御堂笹尾山遺跡



1 鉄製品



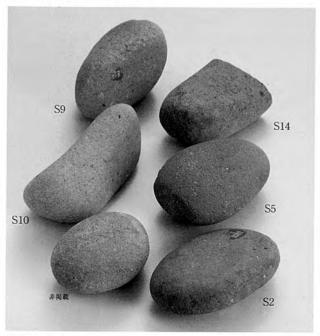
2 鉄製品 X 線写真



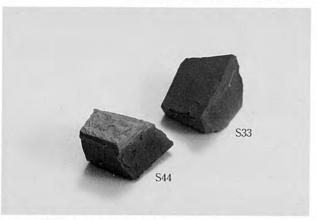
1 竪穴住居 2 出土石器



2 竪穴住居1出土石器



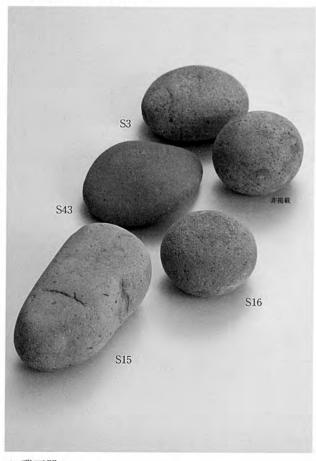
3 礫石器1



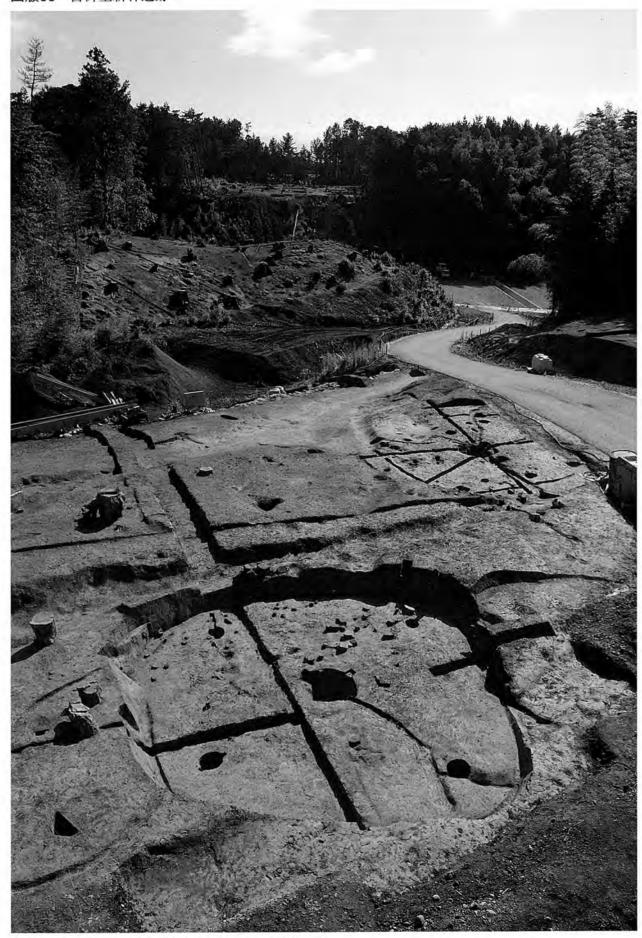
4 竪穴住居27ほか出土碧玉片



5 竪穴住居28出土砥石



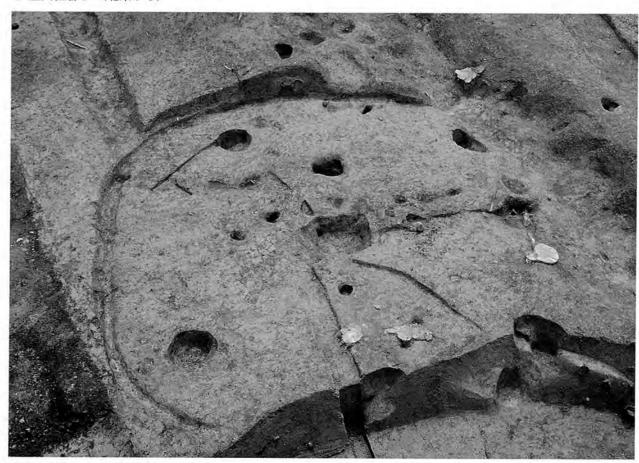
6 礫石器2



竪穴住居 2 (遠方に古御堂笹尾山遺跡を望む 北東から)



(北東から)



2 竪穴住居 4 (北西から)

図版68 古御堂新林遺跡



1 竪穴住居1 地床炉検出状況 (西から)

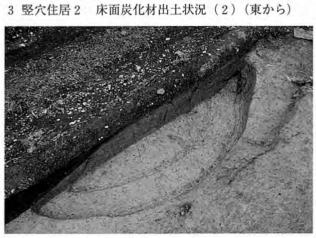


5 テラス1 (南東から)

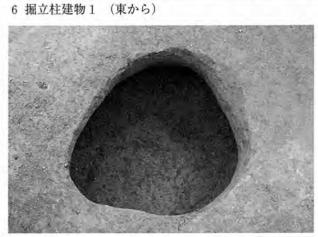


2 竪穴住居 2 床面炭化材出土状況 (1) (南から)

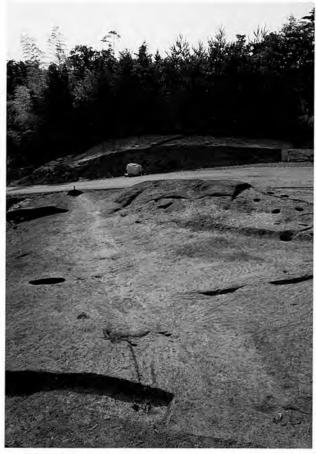




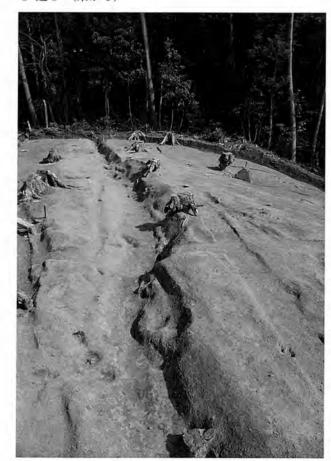
4 竪穴住居 5 (西から)



7 土坑1



1 道1 (東から)



4 道2 (北西から)



2 道1土層断面 (北東から)



3 道2土層断面 (南東から)



5 斜面部包含層土層断面 (B-B'ベルト 北から)



6 斜面部包含層(⑭層)遺物出土状況

図版70 古御堂新林遺跡



1 包含層出土遺物 (1) 12~14層



2 包含層出土遺物 (2) 12~14層



1 包含層出土遺物 (3) 図3位~14層



2 包含層出土遺物 (4) 図3位~14層



3 包含層出土遺物 (5) 図3位~14層

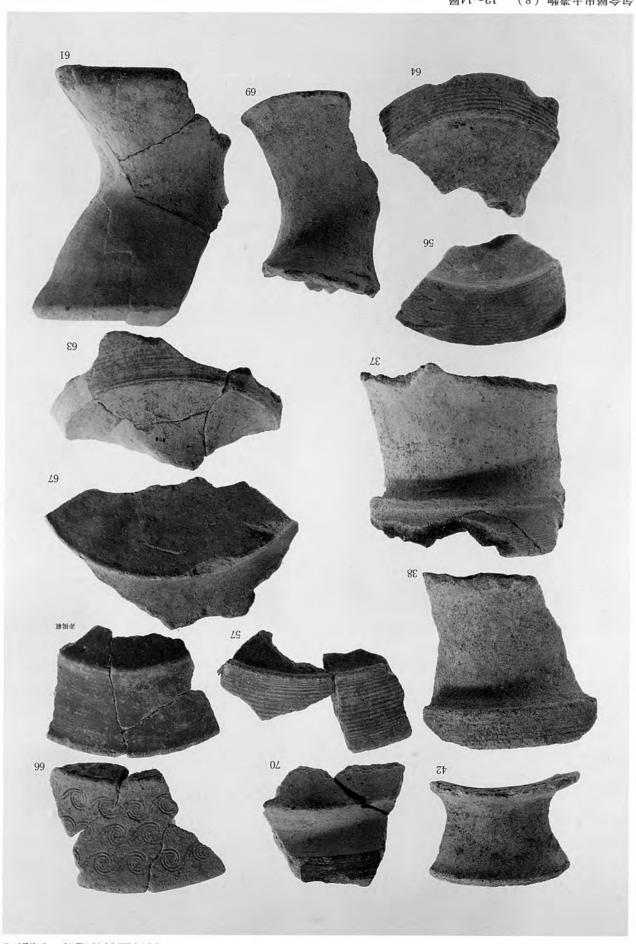


4 包含層出土遺物 (6) 図32~14層

図版72 古御堂新林遺跡



包含層出土遺物 (7) 図32~4層

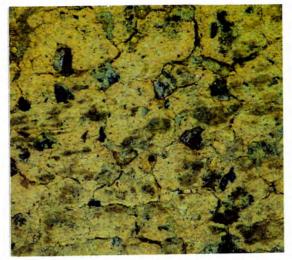


67就図 樹叢林豫堂瞈古

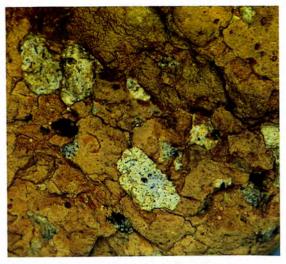


包含層出土遺物 (8) 12~14層

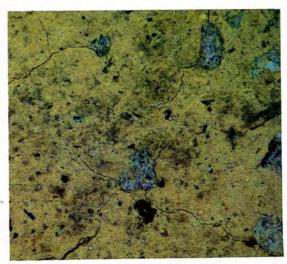
図版74 特論図版



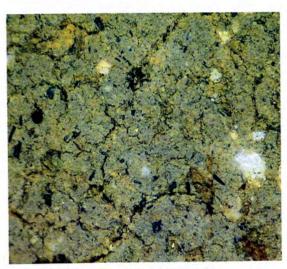
1. 押平尾無遺跡No.29 (弥生中期後葉、甕)



2. 押平尾無遺跡No.32 (弥生後期後葉、甕)



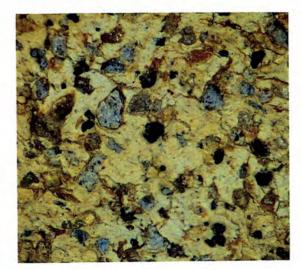
3. 押平尾無遺跡No.5 (弥生後期末、甕-タタキ)



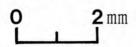
4. 押平尾無遺跡No.9 (古墳初頭、甕)

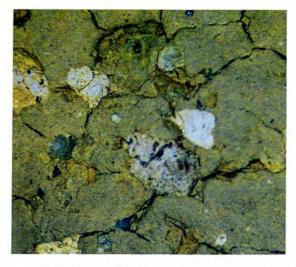


5. 押平尾無遺跡No.8 (古墳中期、甕)

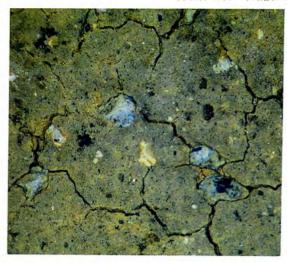


6. 古御堂笹尾山遺跡No.40 (古墳初頭、壺)

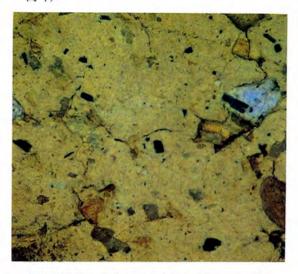




7. 古御堂笹尾山遺跡No.10(古墳中期末~後期前葉、 高环)



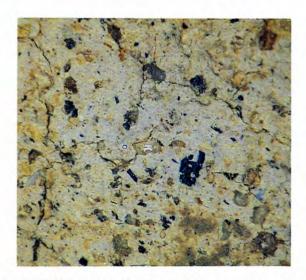
8. 古御堂笹尾山遺跡No.46(古墳後期前葉、甕)



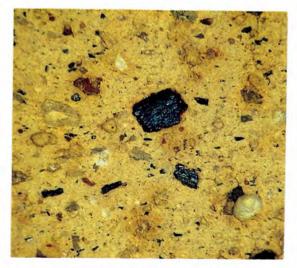
9. 古御堂笹尾山遺跡No.29 (古墳後期中葉、甕)



10. 茶畑第1遺跡No.2 (弥生中期後葉、甕)



11. 茶畑第 1 遺跡No.15(弥生後期末~古墳初頭、鼓形器台)



12. 茶畑第1遺跡No.21 (古墳前期、甕)

0 2 mm

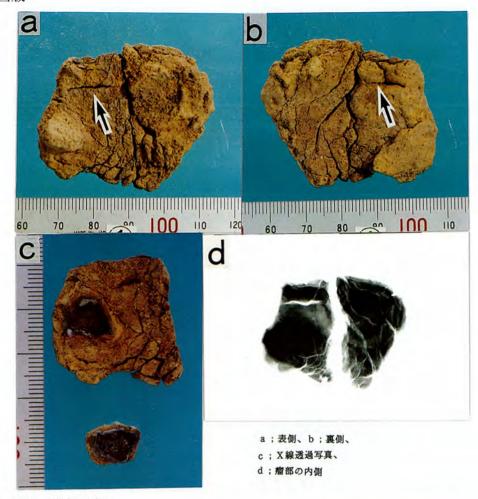


写真1 鉄片の外観写真

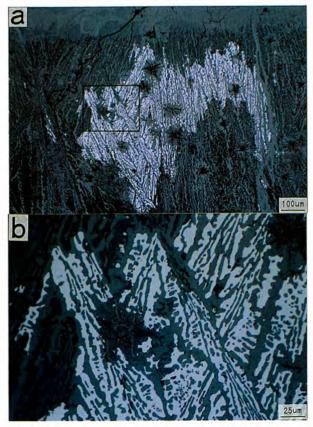


写真2 採取した試片のミクロ組織(左側断面)

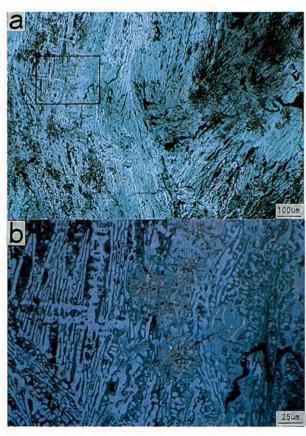
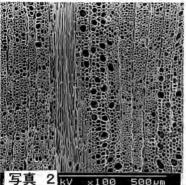


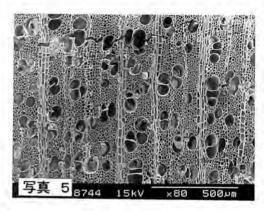
写真3 採取した試片のミクロ組織(右側断面)

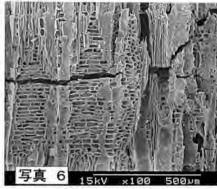




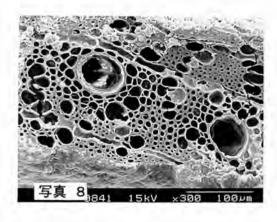


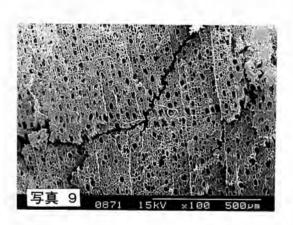




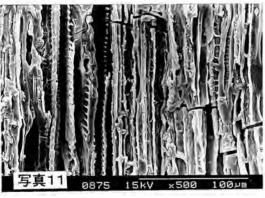


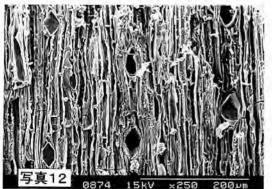






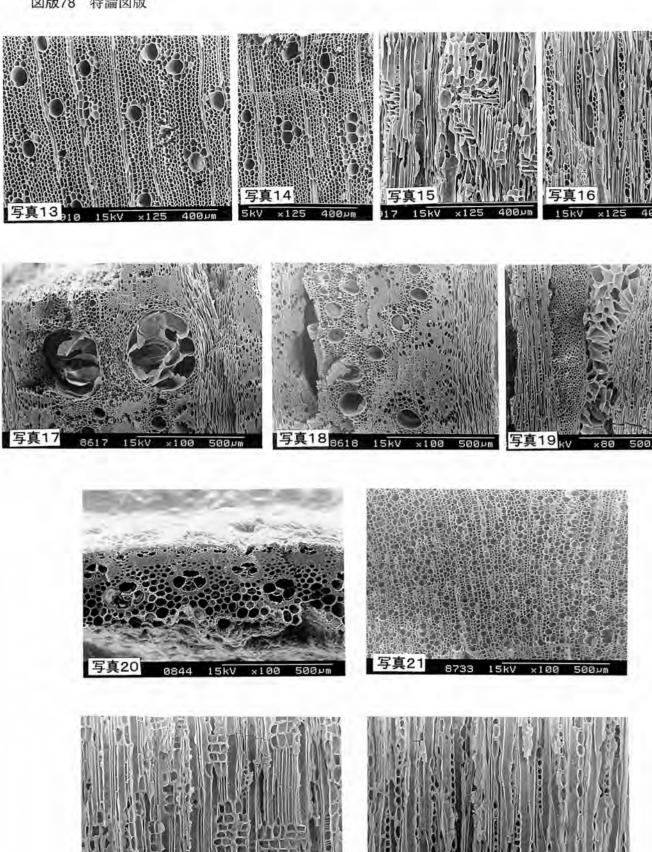


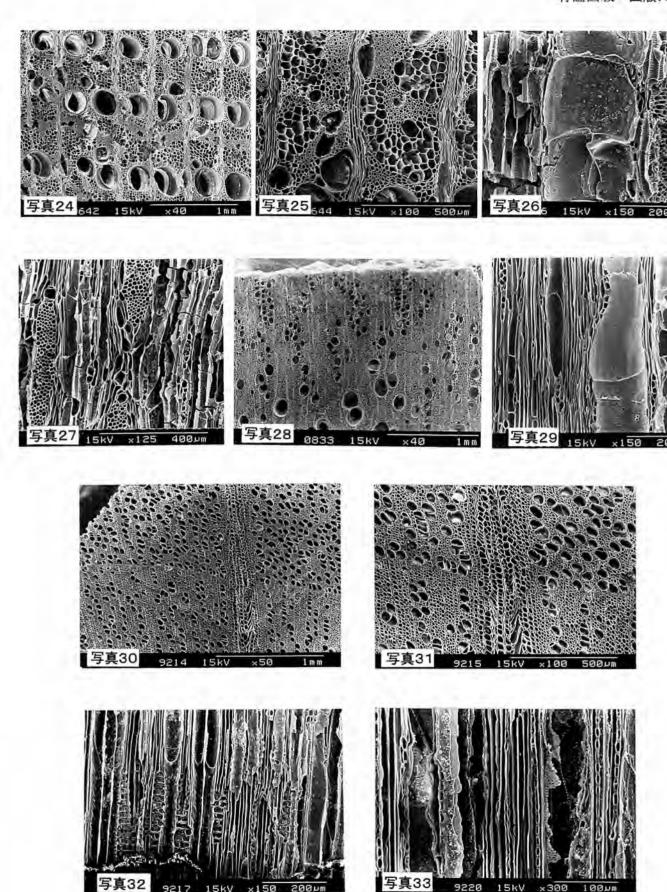




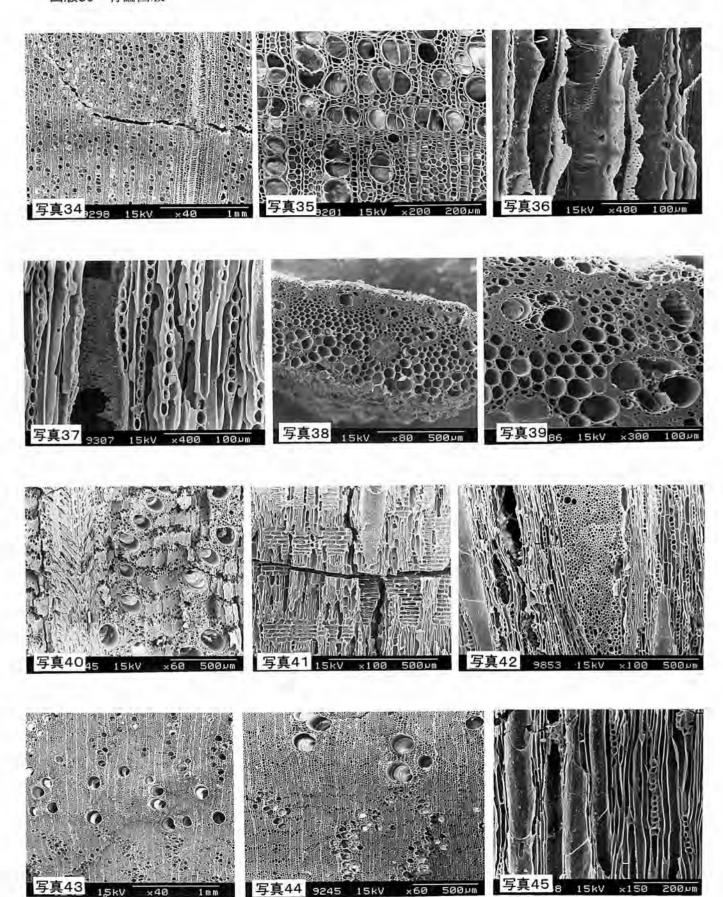
古御堂笹尾山遺跡 出土木材顕微鏡写真1

図版78 特論図版

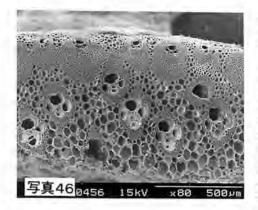


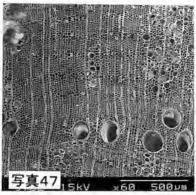


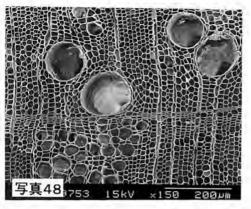
古御堂笹尾山遺跡 出土木材顕微鏡写真3

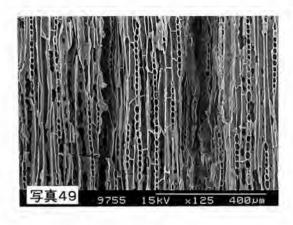


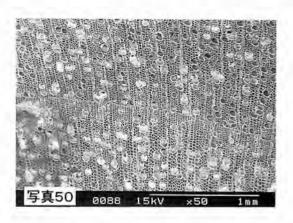
古御堂笹尾山遺跡 出土木材顕微鏡写真 4

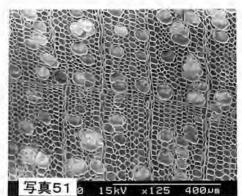


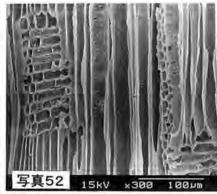


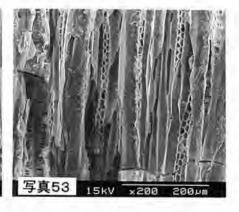


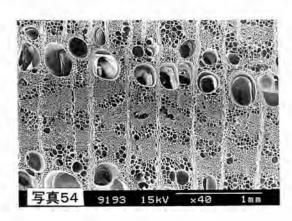


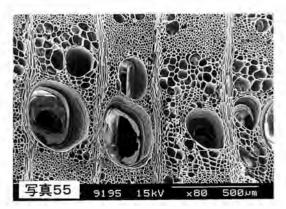




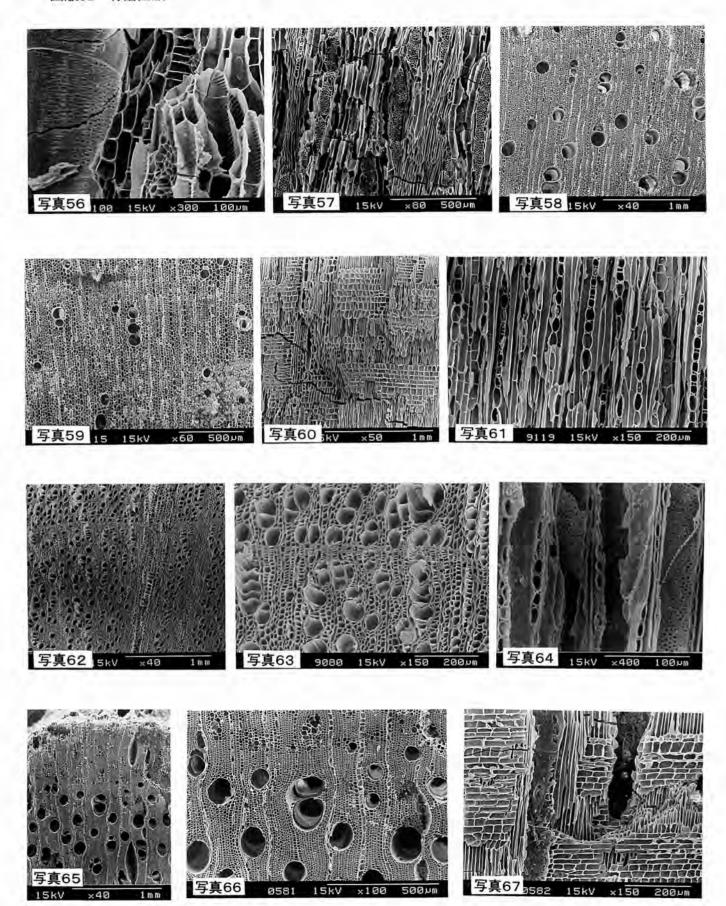




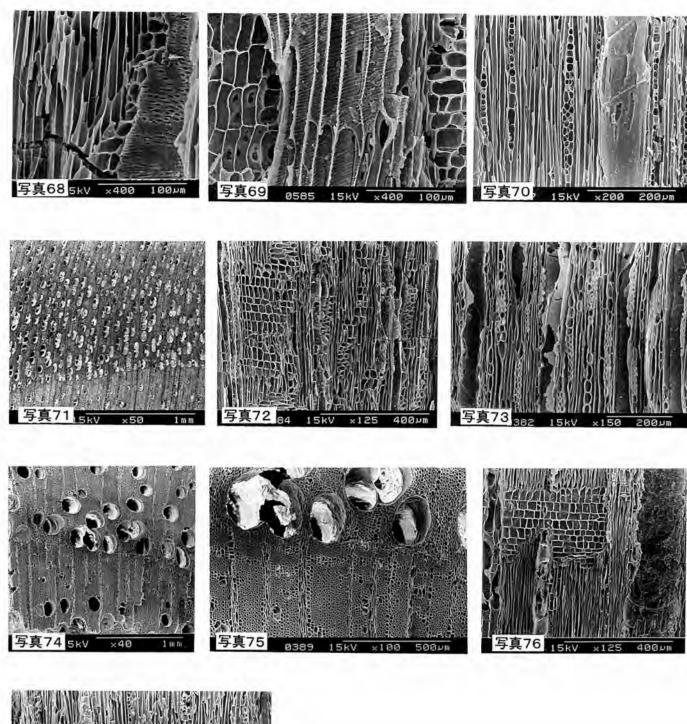


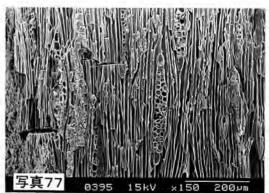


古御堂笹尾山遺跡 出土木材顕微鏡写真5



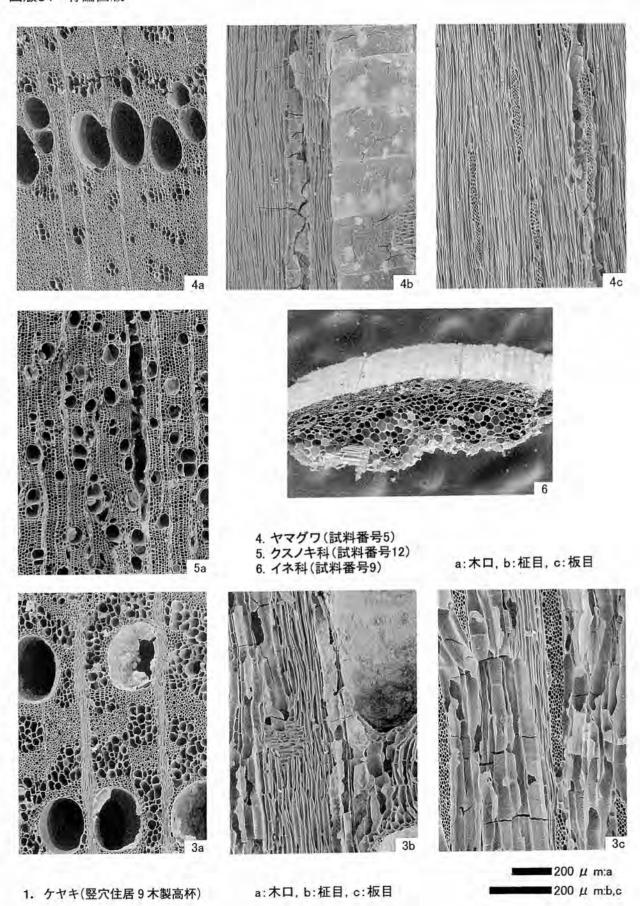
古御堂笹尾山遺跡 出土木材顕微鏡写真 6

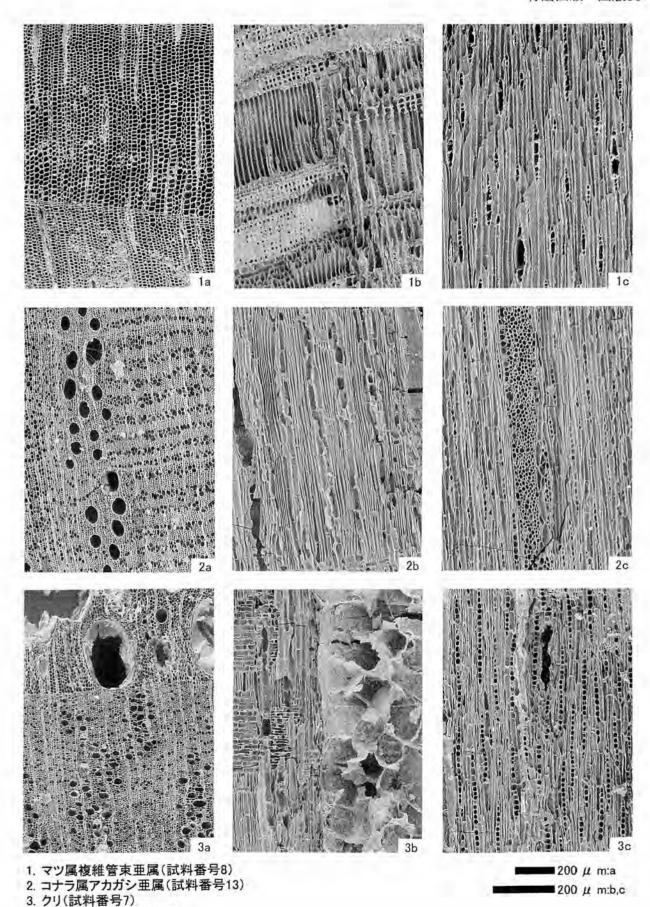




古御堂笹尾山遺跡 出土木材顕微鏡写真7

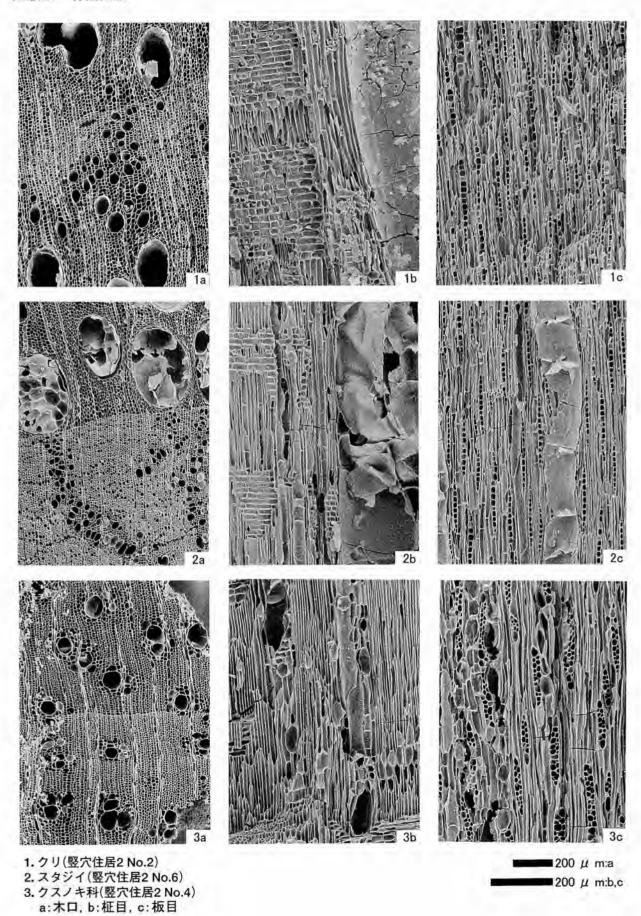
図版84 特論図版





押平尾無遺跡 出土木材顕微鏡写真 2

a:木口, b:柾目, c:板目



報告書抄録

報告書抄跡									
ふりがな	ちゃばたいせきぐん ちゃばただいいちいせき	おしから	おなしいせき	き こみどうささおやまいせき こみどうしんばやしいせき					
-	茶畑遺跡群								
書名 	茶畑第1遺跡 押平尾無遺跡 古御堂笹尾山遺跡					貴跡 古御	甲堂新林遺	跡	
副書名	一般国道9号(名和淀江道路)の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書								
巻次	VI								
シリーズ名	鳥取県教育文化財団調査報告書								
シリーズ番号	93								
編著者名	西川徹 日置智 湯川善一 浜田真人 三木雅子 森本倫弘 岡野雅則 小林桃子								
	浅川滋男 竹中千恵 白石純 佐々木稔 古川郁夫 菅野仁美								
編集機関	財団法人鳥取県教育文化財団 埋蔵文化財センター								
所在地	〒680-0151 鳥取県岩美郡国府町宮下1260 Tel.0857-27-6717								
発行年月日	2004年3月31日								
所収遺跡名	所在地	市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
茶畑第1遺跡	attick(kut) b k j stata est l u s 西伯郡名和町大字押平 asc c a n u a 字小坂平ル805ほか	31387	41	35° 29′ 09″	133° 29′ 03″	20020422~ 20030313	6320 m²		
押平尾無遺跡	さいはくぐんなわちょうおおあざおしなら 西伯郡名和町大字押平 あざおなし 字尾無ほか	31387	303	35° 29′ 11″	133° 29′ 08″	20021022~ 20021128 20030421~ 20031003	6900m²	一般国道 9 号	
古御堂笹尾山遺跡	まいはくくんなわちょうおおめざこから 西伯郡名和町大字古御 うちさなからさお 堂字中笹尾844ほか かさかみきさお 字上笹尾836ほか	31387	304	35° 29′ 14″	133° 29′ 11″	20021001~ 20030228 20030423~ 20030731	4660 m²	(名和淀江道 路)の改築	
こみどうしんばやしいせき 古御堂新林遺跡	^{さいはくぐんなわちょうおおあざこ み 西伯郡名和町大字古御 ビうあざうわまえば 堂字上前場653ほか}	31387	313	35° 29′ 17″	133° 29′ 18″	20030526~ 20030829	3092mi		
所収遺跡名	種別 おもな時代		おもな遺構		おもな遺物		特記事項		
茶畑第1遺跡		次化時代由期		竪穴住居、 掘立柱建物、 土坑、落し穴、 溝、古墳、ピッ ト		弥生土器、 土師器、須恵器、 石製品		独立棟持柱を持つ 掘立柱建物 3 棟	
押平尾無遺跡		落 弥生時代終末期~ 古墳時代前期		竪穴住居、竪穴、 掘立柱建物、 テラス、土坑、 溝、ピット		弥生土器、 土師器、須恵器、 鉄製品、石製品		焼失住居2棟	
古御堂笹尾山遺跡	集落 古墳時代中期~	弥生時代後期~ 古墳時代前期 古墳時代中期~ 古墳時代後期		土坑、落し穴、		弥生土器、 土師器、須恵器		焼失住居4棟	
古御堂新林遺跡	集落 弥生時代後期~ 弥生時代	落 弥生時代後期~ 弥生時代終末期		竪穴住居、道		弥生土器、 土師器、須恵器、 鉄製品、石製品		焼失住居2棟	

鳥取県教育文化財団調査報告書93

一般国道 9 号(名和淀江道路)の改築に伴う 埋蔵文化財発掘調査報告書 VI(第 3 分冊) 鳥取県西伯郡名和町

茶畑遺跡群

古御堂笹尾山遺跡 古御堂新林遺跡

発 行 2004年3月31日

編 集 財団法人 鳥取県教育文化財団

埋蔵文化財センター

〒680-0151 岩美郡国府町宮下1260

電話 (0857) 27-6717

発行者 財団法人 鳥取県教育文化財団

印 刷 米子プリント社